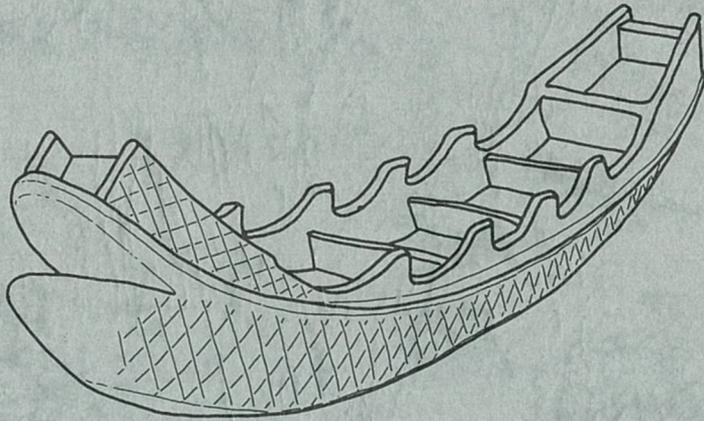


(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第90輯

陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ

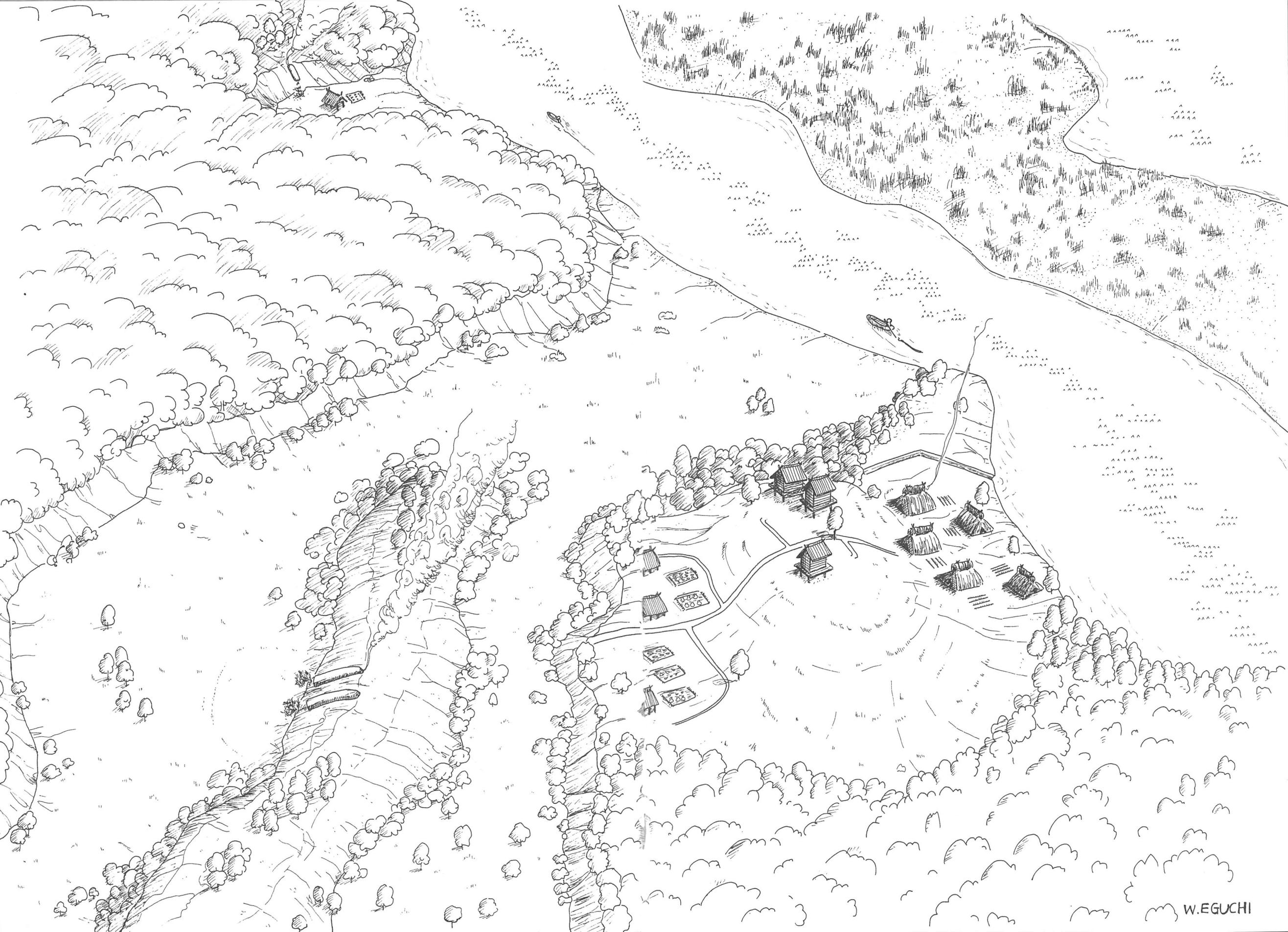
近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

本文編



1995

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第90輯

すえむら 陶邑・おばでら 大庭寺遺跡Ⅳ

近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

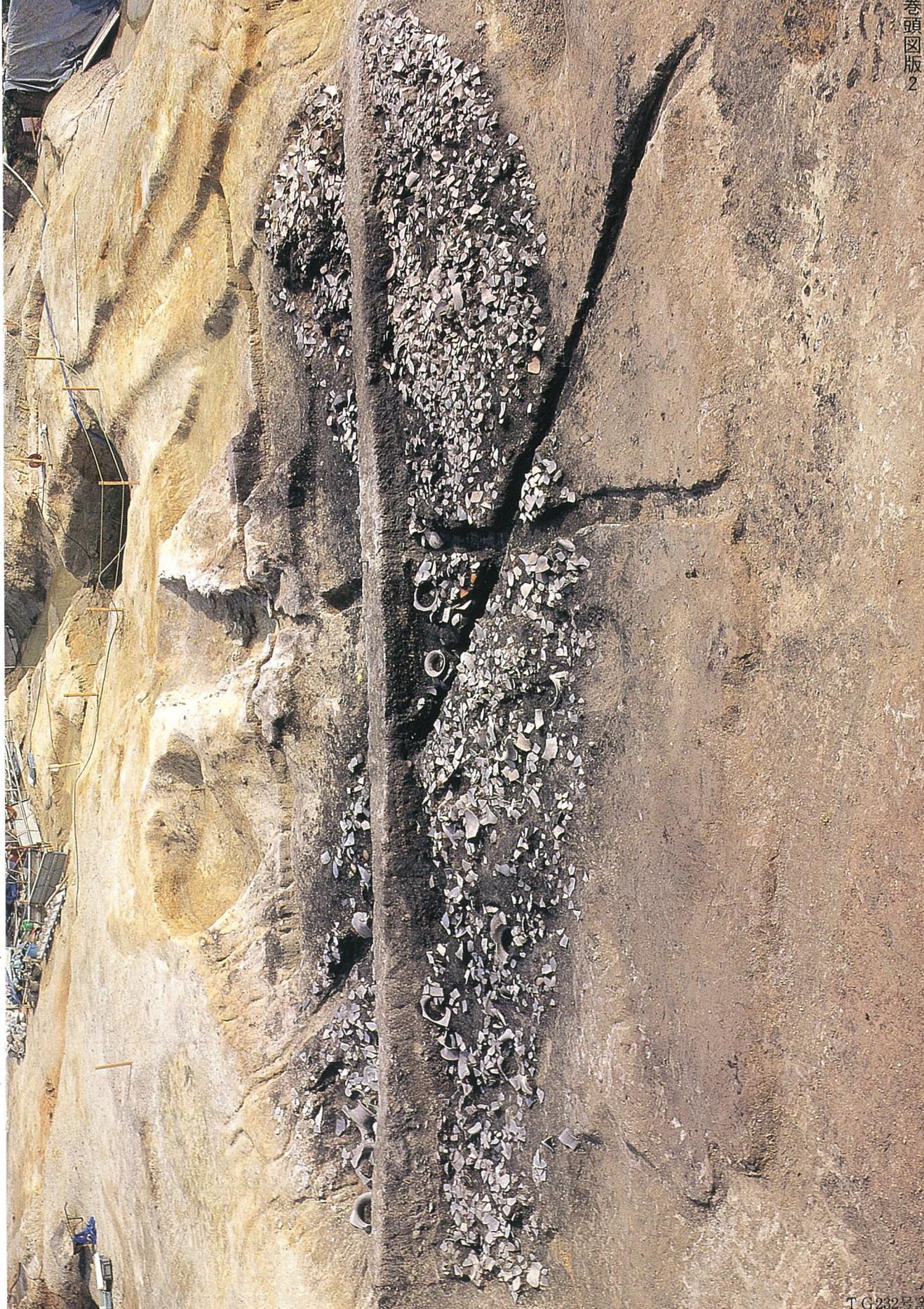
本文編

1995

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



T G 232号窯 出土船形土器





T G 232号窯 出土土器

序 文

大阪府堺市の東南部に広がる丘陵地帯には、旧石器時代から現在に至るまでの数多くの遺跡が存在しています。特に、古墳時代中期から始まる須恵器生産においては、「陶邑」と呼称されるこの地が、全国の拠点となり中心的な役割を果たしていたと考えられています。

大阪府教育委員会では、これらの遺跡につきまして、これまでもその保護に努め、関西国際空港の開港に伴います関連事業につきましても、用地内にあります遺跡につき関係者と協議を重ね、その取り扱いについては万全の体制でのぞんでまいりました。

今回、報告書を刊行いたします。大庭寺遺跡も、空港の重要なアクセス道路である近畿自動車道松原・すさみ線の建設に先立ち、昭和62年度より財団法人大阪府埋蔵文化財協会が発掘調査を実施した遺跡であります。調査には約6年間の月日を費やし平成5年度に終了しましたが、この間、我が国で最古段階とされる須恵器窯やその須恵器を製作した人々の集落などが次々と検出され「須恵器のはじまり」を考えるうえで貴重な成果をあげることができました。その成果はこれまでに3冊の報告書として刊行しております。これも関係各位に多大のご協力をいただいた結果であり、深く感謝しております。

今後とも、本府の文化財行政に対して、引き続きご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成7年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 田中 宏

序 文

大阪府堺市域には、巨大古墳が連なる百舌鳥古墳群、全国の須恵器生産の拠点となった「陶邑」が築かれており、古墳時代から大きく開発が行われ、歴史的にも重要な位置を占めている地域です。

堺市の南東部に所在する大庭寺遺跡は、この「陶邑」の一角に位置しています。調査は、関西国際空港のアクセス道路である近畿自動車道の建設に伴い、昭和62年度から平成5年度まで行われ、弥生時代から鎌倉時代に至る多くの遺構や遺物が検出されました。このうち特に、古墳時代の須恵器窯に伴う灰原の調査では、最古段階に位置づけられる膨大な量の須恵器が我々の眼前に現われ、須恵器生産の開始について大きな問題を投げかけました。また、これらの須恵器を製作した人々の集落では、その構造が明らかにされたほか、朝鮮半島様式の煮沸用日常土器も出土し、須恵器生産に果たした渡来人の活躍についても、その実態が明らかになりました。

これら大庭寺遺跡における古墳時代の調査成果によって、これまで推定の域を越えることのなかった、須恵器生産に関する諸問題が解明されることが期待されます。本書は大庭寺遺跡調査報告書の4冊目に当たり、窯跡の成果を中心に報告しています。本書がこれら問題解明の一助となれば幸いです。

現地調査および報告書刊行に当たっては、日本道路公団大阪建設局、堺市教育委員会、地元各位をはじめ関係各位には多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも、当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成7年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
理事長 岩井 幹郎

例 言

1. 本書は、近畿自動車道松原・すさみ線建設工事に先立つ埋蔵文化財調査のうち、堺市小代・大庭寺地内に所在する大庭寺遺跡の発掘調査報告書の「Ⅳ」である。
2. 調査と報告書作成は、日本道路公団の依頼を受け大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 本報告書は、大庭寺遺跡の昭和62年度から平成5年度までの調査の中で、平成2年度と平成3年度に実施した大庭寺遺跡（その5）と大庭寺遺跡（その6）の一部分を掲載している。掲載した調査区は、Ⅵ-A調査区（協会調査コード90-02）、Ⅵ-B調査区（協会調査コード91-05）である。
4. 現地調査期間は、大庭寺遺跡（その5）が平成2年5月～3年3月、大庭寺遺跡（その6）が平成3年4月～4年2月である。整理事業は平成3年1月から継続的に行っている。
5. 現地調査及び整理事業の担当者は以下のとおりである。

現地調査

大庭寺その5	I区-C・D・E	(調査コード90-02)	富加見泰彦・土井和之
	Ⅵ区-A	(調査コード90-02)	奥和之
大庭寺その6	Ⅵ区-B	(調査コード91-05)	奥和之
	Ⅷ区	(調査コード91-03)	岡戸哲紀
	Ⅸ区	(調査コード91-04)	岡戸哲紀

整理事業

大庭寺その5	I区-C・D	富加見泰彦・土井和之（陶邑・大庭寺Ⅲで報告）
	Ⅵ区-A	奥和之・岡戸哲紀
大庭寺その6	Ⅵ区-B	藤田憲司・奥和之・岡戸哲紀
	Ⅷ・Ⅸ区	岡戸哲紀（整理中）

6. 本書の執筆は、藤田憲司、奥和之、岡戸哲紀が行い、その分担については目次に記している。編集は岡戸が行った。
7. 整理では、土器の産地同定を奈良教育大学教授 三辻利一氏に依頼し、玉稿をいただいた。

8. 写真撮影は、遺構については各担当者と小倉勝、遺物については小倉勝・加茂幸彦が行った。
9. 出土遺物・写真は、一括して財団法人大阪府埋蔵文化財協会が保管しており、広く利用されることを希望する。管理は当協会資料班が担当しているが、出土遺物については報告書を基準にして行い、写真については当協会の遺跡コードを基準にして行っている。
10. 遺跡の平面図・遺構図は、航空写真測量によって作成している。図面の縮尺は、それぞれ1/20、1/100の2種類である。保管・管理は当協会資料班が行っている。
11. 調査の実施に当たっては、日本道路公団大阪工事事務所、堺市教育委員会、財団法人大阪文化財センターおよび地元各位の協力を得た。また、田辺昭三氏（京都造形芸術大学）、中村浩氏（大谷女子大学）、西村康氏（奈良国立文化財研究所）の各氏には、窯跡での現地調査指導を頂いた。
12. 整理については、数回の遺跡の検討会を実施し以下の方々にご教授をうけた。

安在皓（韓国東国大学校）、安春培（韓国釜山女子大学校）、趙榮濟（韓国慶尚大学校）、金正完（韓国国立扶餘博物館）、金斗喆（韓国国立晋州博物館）、河仁秀（韓国釜山直轄市立博物館）、洪滌植（韓国釜山直轄市立博物館）、李柱憲（韓国昌原文化財研究所）、朴升圭（韓国社団法人嶺南埋蔵文化財研究院）、申敬澈（韓国慶星大学校）、宋桂鉉（韓国釜山直轄市立博物館）、孫明助（韓国国立慶州博物館）、朴天秀（大阪大学大学院）

井原稔（羽曳野市教育委員会）、植野浩三（奈良大学）、亀田修一（岡山理科大学）、定森秀夫（京都文化博物館）、田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、土井和幸（堺市教育委員会）、福岡澄男（財団法人大阪文化財センター）、藤原学（吹田市立博物館）
富加見泰彦（和歌山県教育委員会）、柳田康雄（福岡県教育委員会）、和田晴吾（立命館大学）
〈順不同〉

なお、お名前を記した方々の他にも、最終項に記するように多くの方々に、現地や整理事務所に度々足を運んで頂き、有形無形のご教授を頂いている。

凡 例

1. 本調査および本書では、第Ⅲ章第1節でのべるような国土座標（第Ⅵ系）による地区割り設定がなされているが、平面図では方位が座標北を示し、図中にはXとY座標軸がm単位で標記される。
2. 標高は、東京湾標準潮位T.P.で統一している。
3. 遺構番号は各調査区で通し番号を付したが、調査区を越えて連続する遺構もあり、本書では第Ⅲ章第1節で示しているように新たな遺構番号を付し、これまで報告済みの遺構については前例に準じた。また、基本的に図中には本文中に登場する遺構のみを示している。遺構の性格を示す記号は当協会「発掘調査規程」に準じているが、窯跡については大阪府教育委員会と協議し陶邑窯跡群の窯番号に統一している。
4. 本書で使用した土壌色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』を使用して命名した。
5. 遺構平面図についての縮尺については統一していない。
6. 遺物は、出土地点・種類を問わず通し番号を付し、図と写真図版に共通する。遺物の縮尺については基本的に1/4で統一したが、一部1/6（大型甕）、2/3（窯道具）で示したのものもある。土器の断面図については基本的に須恵器を黒塗り、土師器を白塗りとし、軟質系土器については焼成によって硬質のものは黒塗り、軟質のものは薄い網掛け、瓦質風のもの濃い網掛けを行い表現した。また、これらの土器はこれまで、いわゆる韓式系軟質土器の範疇で考えられていたものであるが、焼成状況の違いにより仕上がりに差異があり、ここでは朝鮮半島系の日常土器を軟質系土器として扱っている。
7. 焼き歪んだ土器は、基本的に復元実測で行っている。
8. 本書の中で、研究の現状から勘案して不適当な表現がみられた場合は、すべて報告者の責に帰すが、他意のあるものではない点御容赦願いたい。

本文目次

巻頭図版	
序文	
例言	
凡例	
第I章 調査の経緯	(藤田) 1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第II章 位置と環境	(岡戸) 5
第1節 遺跡の位置	5
第2節 地理的環境	5
第3節 考古学的環境	8
第III章 調査概要	(岡戸) 15
第1節 調査の方法	15
第2節 調査地の地形	18
第3節 既往の調査	21
第4節 1991年度以降の調査概要	26
第5節 財団法人大阪文化財センターの調査	30
第IV章 第VI-A調査区の調査成果	(岡戸) 31
第1節 1-O-Lの調査概要	31
第1項 概要	31
第2項 出土遺物	32
第2節 1-O-L土器溜り	40
第1項 検出状況	40

第2項	出土遺物	40
1.	上層の遺物	40
2.	中層の遺物	53
3.	下層の遺物	70
第3項	土器溜りの性格	84
第V章	第VI-B調査区の調査成果	87
第1節	2-O Lの調査概要 (岡戸)	87
第1項	谷の概要と出土遺物	87
第2項	検出された遺構	90
1.	古墳時代の遺構	90
2.	弥生時代の遺構	91
第2節	T G 233号窯の調査	92
第1項	T G 233号窯の概要 (奥)	92
第2項	窯体の状況 (奥)	93
第3項	灰原の状況 (奥)	94
第4項	出土遺物 (岡戸)	98
1.	窯体内最終焼成面出土遺物	98
2.	船底ピット出土遺物	100
3.	窯体内埋土出土遺物	100
4.	灰原出土遺物	103
5.	遺物の時期	108
第3節	T G 232号窯の調査	109
第1項	T G 232号窯の概要 (奥)	109
第2項	灰原の状況 (奥)	109
第3項	出土遺物 (藤田・奥・岡戸)	113
1.	器種構成 (岡戸)	113
2.	船形土器 (奥)	115
3.	須恵器 (藤田・岡戸)	116
4.	軟質系土器 (岡戸)	257

5. 窯道具	（岡戸）	260
6. 土師器		264
第4節 T G 232号窯灰原下層の調査	（岡戸）	265
第1項 概要		265
第2項 出土遺物		265
第VI章 T G 231号窯の調査	（岡戸）	267
第1節 概要		267
第2節 出土遺物		267
第VII章 遺構・遺物の検討		271
第1節 T G 232号窯の初期須恵器	（岡戸）	271
第2節 大型甕に関する2・3の課題	（藤田）	305
第3節 T G 232号窯について	（奥）	319
第4節 1-O L土器溜りの初期須恵器	（岡戸）	321
第5節 大庭寺遺跡の軟質系土器について	（岡戸）	331
第6節 T G 232号窯灰原下層出土の土師器	（藤田）	339
第VIII章 分析		343
第1節 大庭寺遺跡T G 231・232号窯出土初期須恵器の蛍光X線分析	（奈良教育大学 三辻利一，今井加織）	343
第2節 ¹⁴ C年代測定	（川崎地質株式会社 渡辺正巳）	359
第IX章 まとめ	（岡戸）	363

挿図目次

第1図	大阪府位置図	1
第2図	大庭寺遺跡位置図(1988年)	6
第3図	大庭寺遺跡調査位置図	7
第4図	周辺の遺跡分布図(大阪府文化財分布図 1991年3月より作成)	9
第5図	主要な初期須恵器窯と周辺集落	11
第6図	代表的な初期須恵器(S=1/6 『陶邑Ⅲ』より作成)	12
第7図	調査区割全体図	16
第8図	調査地区割模式図	17
第9図	大庭寺遺跡周辺の谷地形	19
第10図	調査区の地形	20
第11図	古墳時代の遺構と地形断面図	23~24
第12図	1990~1992年度調査区割図	25
第13図	第10調査区遺構図	28
第14図	第11調査区遺構図	29
第15図	1-O-L土層図	33~34
第16図	1-O-L丘陵1側斜面出土遺物(1)	35
第17図	1-O-L丘陵1側斜面出土遺物(2)	36
第18図	1-O-L丘陵1側斜面出土遺物(3)	37
第19図	1-O-L丘陵2側斜面, 谷中央部出土遺物	38
第20図	1-O-L丘陵1・2側斜面, 谷中央部出土遺物	39
第21図	1-O-L土器溜り上層出土遺物(1)	41
第22図	1-O-L土器溜り上層出土遺物(2)	44
第23図	1-O-L土器溜り上層出土遺物(3)	46
第24図	1-O-L土器溜り上層出土遺物(4)	47
第25図	1-O-L土器溜り上層出土遺物(5)	49
第26図	1-O-L土器溜り上層出土遺物(6)	50
第27図	1-O-L土器溜り上層出土遺物(7)	51
第28図	1-O-L土器溜り上層出土遺物(8)	52

第29図	1-O L土器溜り上層出土遺物 (9)	54
第30図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (1)	55
第31図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (2)	56
第32図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (3)	57
第33図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (4)	58
第34図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (5)	60
第35図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (6)	62
第36図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (7)	63
第37図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (8)	64
第38図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (9)	65
第39図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (10)	66
第40図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (11)	67
第41図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (12)	68
第42図	1-O L土器溜り中層出土遺物 (13)	69
第43図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (1)	71
第44図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (2)	72
第45図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (3)	74
第46図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (4)	75
第47図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (5)	77
第48図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (6)	78
第49図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (7)	79
第50図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (8)	80
第51図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (9)	81
第52図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (10)	82
第53図	1-O L土器溜り下層出土遺物 (11)	83
第54図	2-O L出土遺物	88
第55図	2-O L周辺遺構配置図	89
第56図	38-O S出土遺物	91
第57図	T G 233号窯全体図	92
第58図	T G 233号窯平・断面図	95~96
第59図	T G 233号窯最終焼成面遺物出土状況	97

第60図	T G 233号窯窯体内最終焼成面出土遺物	99
第61図	T G 233号窯船底ピット出土遺物	100
第62図	T G 233号窯窯体内埋土出土遺物（1）	101
第63図	T G 233号窯窯体内埋土出土遺物（2）	102
第64図	T G 233号窯灰原出土遺物（1）	104
第65図	T G 233号窯灰原出土遺物（2）	105
第66図	T G 233号窯灰原出土遺物（3）	106
第67図	T G 233号窯灰原出土遺物（4）	107
第68図	T G 232・233号窯灰原断面図	111～112
第69図	T G 232号窯出土船形土器	114
第70図	T G 232号窯出土船形土器の復元図	115
第71図	T G 232号窯出土須恵器（杯・把手付椀・小型鉢など）	117
第72図	蓋断面形の比較	120
第73図	T G 232号窯出土須恵器（蓋）	121
第74図	T G 232号窯出土須恵器（有蓋高杯）	123
第75図	T G 232号窯出土須恵器（無蓋高杯1）	125
第76図	T G 232号窯出土須恵器（無蓋高杯2）	127
第77図	T G 232号窯出土須恵器（無蓋高杯3）	128
第78図	T G 232号窯出土須恵器（無蓋高杯4）	130
第79図	T G 232号窯出土須恵器（高杯脚部1）	131
第80図	高杯接合部拓影（脚部）	132
第81図	T G 232号窯出土須恵器（高杯脚部2）	133
第82図	T G 232号窯出土須恵器（甗・小型壺）	135
第83図	T G 232号窯出土須恵器（小型壺口縁部）	137
第84図	T G 232号窯出土須恵器（壺）	139
第85図	器台紋様拓影（1）	140
第86図	T G 232号窯出土須恵器（筒形器台）	141
第87図	高杯形器台分類図	142
第88図	T G 232号窯出土須恵器（高杯形器台1）	144
第89図	T G 232号窯出土須恵器（高杯形器台2）	145
第90図	T G 232号窯出土須恵器（高杯形器台3）	146

第91図	T G 232号窯出土須恵器 (高杯形器台 4)	147
第92図	T G 232号窯出土須恵器 (高杯形器台 5)	148
第93図	T G 232号窯出土須恵器 (高杯形器台 6)	149
第94図	T G 232号窯出土須恵器 (高杯形器台 7)	150
第95図	T G 232号窯出土須恵器 (高杯形器台 8)	152
第96図	T G 232号窯出土須恵器 (高杯形器台 9)	153
第97図	T G 232号窯出土須恵器 (高杯形器台10)	154
第98図	器台紋様拓影 (2)	155
第99図	器台紋様拓影 (3)	156
第100図	器台紋様拓影 (4)	157
第101図	器台紋様拓影 (5)	158
第102図	器台紋様拓影 (6)	159
第103図	器台紋様拓影 (7)	160
第104図	器台紋様拓影 (8)	161
第105図	器台紋様拓影 (9)	162
第106図	T G 232号窯出土須恵器 (器台脚部 1)	164
第107図	T G 232号窯出土須恵器 (器台脚部 2)	165
第108図	T G 232号窯出土須恵器 (壺 1)	166
第109図	T G 232号窯出土須恵器 (壺 2)	167
第110図	壺の口縁形態	169
第111図	T G 232号窯出土須恵器 (壺 3)	170
第112図	T G 232号窯出土須恵器 (壺 4)	171
第113図	T G 232号窯出土須恵器 (壺 5)	172
第114図	T G 232号窯出土須恵器 (壺 6)	173
第115図	T G 232号窯出土須恵器 (壺 7)	174
第116図	T G 232号窯出土須恵器 (壺 8)	175
第117図	T G 232号窯出土須恵器 (壺 9)	176
第118図	T G 232号窯出土須恵器 (壺10)	177
第119図	壺 I 類の口縁形態	179
第120図	T G 232号窯出土須恵器 (壺11)	180
第121図	T G 232号窯出土須恵器 (壺12)	181

第122図	T G 232号窯出土須恵器 (壺13)	182
第123図	T G 232号窯出土須恵器 (壺14)	183
第124図	T G 232号窯出土須恵器 (壺15)	184
第125図	T G 232号窯出土須恵器 (壺16)	185
第126図	T G 232号窯出土須恵器 (壺17)	188
第127図	T G 232号窯出土須恵器 (壺18)	189
第128図	T G 232号窯出土須恵器 (壺19)	190
第129図	壺の紋様	191
第130図	壺の調整	192
第131図	大型甕の調整	195
第132図	大型甕口縁分類図	197
第133図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕1)	199
第134図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕2)	201
第135図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕3)	202
第136図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕4)	203
第137図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕5)	204
第138図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕6)	205
第139図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕7)	206
第140図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕8)	207
第141図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕9)	208
第142図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕10)	209
第143図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕11)	210
第144図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕12)	211
第145図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕13)	212
第146図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕14)	213
第147図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕15)	214
第148図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕16)	215
第149図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕17)	216
第150図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕18)	217
第151図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕19)	218
第152図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕20)	219

第153図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕21)	220
第154図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕22)	221
第155図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕23)	222
第156図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕24)	223
第157図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕25)	225
第158図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕26)	226
第159図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕27)	227
第160図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕28)	228
第161図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕29)	230
第162図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕30)	231
第163図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕31)	232
第164図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕32)	234
第165図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕33)	235
第166図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕34)	236
第167図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕35)	237
第168図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕36)	238
第169図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕37)	239
第170図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕38)	240
第171図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕39)	241
第172図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕40)	242
第173図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕41)	243
第174図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕42)	245
第175図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕43)	246
第176図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕44)	247
第177図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕45)	248
第178図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕46)	249
第179図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕47)	251
第180図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕48)	252
第181図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕49)	254
第182図	T G 232号窯出土須恵器 (大型甕50)	255
第183図	T G 232号窯出土軟質系土器 (平底鉢・長胴甕)	258

第184図	T G 232号窯出土軟質系土器（甌）	259
第185図	T G 232号窯出土焼き台 1	261
第186図	T G 232号窯出土焼き台 2	262
第187図	T G 232号窯出土焼き台 3	263
第188図	T G 232号窯出土土師器（壺）	264
第189図	T G 232号窯灰原の下層出土遺物	266
第190図	T G 231号窯出土須恵器（1）	268
第191図	T G 231号窯出土須恵器（2）	269
第192図	T G 231号窯出土須恵器（3）	270
第193図	有蓋脚付小型壺の比較	273
第194図	大庭寺遺跡と陶質土器の比較（高杯）	275
第195図	無蓋高杯各類出土比率と土師器的影響の強い須恵器	276
第196図	大庭寺遺跡と陶質土器の比較（小型壺）	278
第197図	T G 232号窯における高杯形器台の形態変化	280
第198図	大庭寺遺跡における古段階の高杯形器台	281
第199図	脚部と凸帯の比較	283
第200図	大庭寺遺跡と陶質土器の比較（壺）	286
第201図	大庭寺遺跡と陶質土器の比較（把手付碗）	290
第202図	大庭寺遺跡と陶質土器の比較（器台）	291
第203図	韓国南半部の地図	292
第204図	大庭寺遺跡と陶邑の杯身	295
第205図	大庭寺遺跡の無蓋高杯 A・B類と陶邑の高杯	297
第206図	脚部の法量の比較	297
第207図	大型甕口縁比較図	311
第208図	T G 231・232号窯, 1-O L位置図	314
第209図	大庭寺遺跡56-O Rの出土須恵器（大庭寺II-1期）	328
第210図	大庭寺遺跡393-O L出土軟質系土器（大庭寺I期）	333
第211図	大庭寺遺跡1-O L出土軟質系土器（大庭寺II-2期）	335
第212図	大庭寺遺跡出土土師器	340
第213図	小若江北遺跡と船橋遺跡の土師器	341

表 目 次

表 1	1-O L土器溜り遺物器種構成比率表	85
表 2	T G 232号窯出土須恵器の器種構成比率	113
表 3	大型甕の口径	308
表 4	口頸部外傾度	308
表 5	口径と頸高の相関図 1	312
表 6	口径と頸高の相関図 2	312
表 7	大型甕分布表	314

写 真 目 次

写真 1	現在の大庭寺遺跡	3
写真 2	T G 232号窯で行われた現地説明会	4
写真 3	陶邑上空からのぞむ百舌鳥古墳群	13

分析挿図・表目次

大庭寺遺跡 T G 231号窯・T G 232号窯出土初期須恵器の蛍光 X 線分析

図 1	大庭寺 T G 231・232号窯出土須恵器の R b - S r 分布図	346
図 2	大庭寺 T G 231・232号窯の相関識別	346
図 3	O N 231号窯（狐池南遺跡）出土須恵器の R b - S r 分布図	347
図 4	大庭寺 T G 231号窯と O N 231号窯の相互識別	350
図 5	大庭寺 T G 231号窯と礪波堤窯の相互識別	350
図 6	大庭寺 T G 231号窯と余草里窯の相互識別	351
図 7	大阪陶邑群と内谷洞群の相互識別	351
図 8	大阪陶邑群と慶州群の相互識別	352
図 9	大庭寺 T G 231号窯の須恵器の化学特性	352

図10 大庭寺 T G 232号窯の須恵器の化学特性	353
図11 O N 231号窯の須恵器の化学特性	353
図12 大庭寺遺跡出土陶質土器の R b - S r 分布図	354
図13 大庭寺遺跡出土硬質土器の産地推定	354
大庭寺 T G 231号窯灰原一覧表 (1)	355
大庭寺 T G 231号窯灰原一覧表 (2)	356
大庭寺 T G 232号窯灰原一覧表 (1)	357
大庭寺 T G 232号窯灰原一覧表 (2)	358

¹⁴C年代測定

表 1 測定試料一覧	359
表 2 ¹⁴ C年代測定結果	360
図 1 ¹⁴ C年代測定結果と再計算値	362

付 図

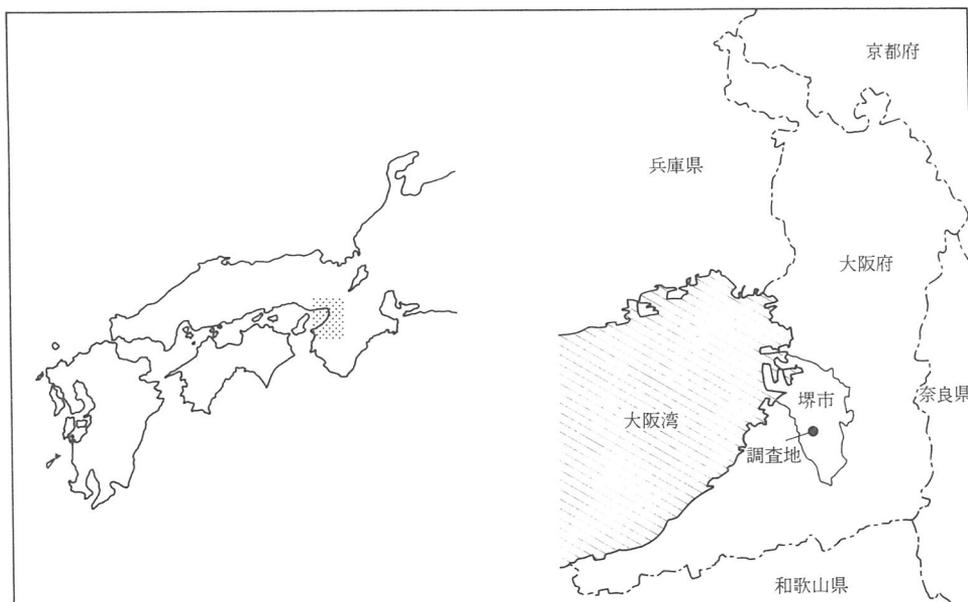
付図 1 T G 232・233号窯平面図
付図 2 T G 232号窯遺物出土状況図
付図 3 遺跡全体図

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経緯

堺市大庭寺と小代に所在する大庭寺遺跡の発掘調査は、1994年9月に開港した関西国際空港の主要アクセスのひとつである、近畿自動車道路松原すさみ線建設に伴って実施されたものである。発掘調査および遺物整理は、日本道路公団大阪建設局の委託によって、大阪府教育委員会の指導のもとに財団法人大阪府埋蔵文化財協会が行った。

本遺跡の発掘調査は1987年の試掘調査に始まり、1993年3月まで足掛け7年の長きにわたって実施している。整理調査および調査成果の報告については、これまで「陶邑・大庭寺遺跡」としてすでに3冊の報告書を刊行している。近畿自動車道路松原すさみ線建設に先立って大庭寺遺跡の発掘調査を担当することになった経緯については、前の報告書を参照していただくことにして、ここでは本書に報告する初期須恵器窯の発掘調査に至った経緯および整理の事情を略記する。



第 1 図 大阪府位置図

第2節 調査経過

1987年に始まった大庭寺遺跡の発掘調査は、用地取得の関係もあって、7年にわたる調査をおおむね遺跡の東端に当たる石津川左岸から西に向けて順次実施したこととなった。そのことは本遺跡の性格を考えながら調査を進める上で、めぐまれた結果となった。

まず初年度の調査では、現石津川の左岸の低地部分で5世紀頃の石津川の旧流路が検出され、流路内およびその左岸丘陵裾部から多くの初期須恵器や軟質系土器が出土している。流路内と川岸にあった初期須恵器の供給元を巡って、この流路と初期須恵器の発見がTG232号窯灰原の調査と須恵器作りのムラの調査の端緒となるものであった。

この流路は幾度かの氾濫で急速に埋まって、奈良時代には径24cmほどの柱根をもつ掘立柱建物群が立ち並び、中世には大きな屋敷地になるなど、その後の土地利用の推移を知ることができた。奈良時代の井戸はがっしりとした木枠をもち、「上」「清水」「水」の字を記した墨書土器が出土し、近くの溝からは円面硯も出土している。中世の屋敷跡は北と西側に幅2m規模の溝が巡り、屋敷地を囲う環濠との解釈もなされた。

1988年からは丘陵部の調査も始まり、初期須恵器を伴う5世紀代の竪穴住居跡や奈良時代から中世にかけての掘立柱建物群も検出されている。この頃には大庭寺遺跡も、少し上流にあって初期須恵器の積み出し基地と考えられている深田遺跡と同じような性格があるのではないかと検討されるようになった。しかしながらまだ、TK73号窯などと異なった新しい窯跡が近くにあるとの確信をもつには至っていなかった時期である。

これとは別に、確実な遺構こそ把握できなかったが、大庭寺の地名の由来につながり、僧行基の開祖とされる大庭院の存在を偲ばせる「大」の字を刻んだ風字硯と土師器、礎石や磚仏なども出土している。

初期須恵器の多さはもとより軟質系土器や甗などの豊富さも相まって、大庭寺遺跡の名は初期須恵器をもつムラとして喧伝され、国内はもとより、須恵器の源流である韓国伽耶地域の研究者の耳目を集めるとともに、我々もその風評に乗って初期須恵器を中心に速報を進めてきた。事実、大庭寺遺跡は初期須恵器作りのムラとして着実にその実体を見せ始め、現実には我々の力量をはるかに超えた内容になっている。しかし、奈良時代や中世の遺構・遺物ももっと正当に評価すべき価値をもっているはずである。

自省の弁として記しておかねばならない。

大庭寺遺跡は微視的に見れば、梅丘陵の中位の段丘面東南先端部付近に位置する。近畿

自動車道路建設に伴う発掘調査が、梶丘陵から派生する幾つかの支脈の東端丘陵頂部から西側斜面の一部の地区の調査に入ったのは1990年のことであった。

それまでに丘陵東側斜面で5世紀の竪穴住居跡や、須恵器作りに使う土製の当て具などが検出されていたものの、丘陵頂部には遺構は少なく、粘土採掘坑と考えた小土坑や掘立柱建物が認められたにすぎない。それでも本遺跡出土の須恵器が調査区の近傍で作られていたことを推定するには充分であった。

丘陵西斜面、濃登ノ池の谷部の肩口（393-O L）の調査を始めた段階で、推定は確信になった。TK73号窯よりも確実に古いと考えられる土器群が焼け歪みの強い土器・窯体片・当て具とともに検出され、その時の報告書には充分記し得なかったが、豊富な軟質系土器の検出によって近傍に窯跡がある可能性はさらに強くなった。その時点では窯跡は調査区の中ではなく、さらに濃登ノ池の谷の南上方にあるであろうと考えていた。結果的にはこの予測は現在も抱いている。例えば393-O Lの出土遺物中には、本書報告のTG232号窯灰原出土遺物には含まれていない古い要素をもつ土器が含まれており、それは今回調査区のごく近傍にその須恵器を焼いた窯跡があると確信している。

待望の初期須恵器窯跡は、予測とは裏腹に当時は埋め立てられていた濃登ノ池の底近くから検出された。TG231号窯とTG232号窯の発見は、まず現地調査担当者によってもたらされた。ただしTG231号窯は調査区の端にわずかに検出されただけであり、TG232号



写真1 現在の大庭寺遺跡

第2節 調査経過

窯はその上層に6世紀末～7世紀初頭のTG233号窯跡の灰原がほぼその全面を覆っており、検出時は初期須恵器のプライマリーな灰原があるのかどうか慎重論も少なくなかった。日本道路公団の協力もあって、この地区の本格的な調査が1991年度に引き継がれたのも幸運であった。

1991年度前半の調査は、上層のTG233号窯跡・灰原と下層のTG232号窯の灰原の調査を中心に行ったが、その下層および前年調査の393-O Lの残りの部分は1991年度後半期の調査として新たに担当者を加えて実施した。この調査で濃登ノ池西側斜面に検出された2カ所の土器溜りが須恵器焼成後の二次的な選別場および廃棄場所との想定も行い、石津川左岸から続く一連の初期須恵器製作集団のムラであることを確信するに至った。

本書ではTG232号窯の調査結果を中心にTG231号窯など関連する資料について報告する。大庭寺遺跡に限ったことではないが、当協会はこれまで、期限の限られた現地発掘調査について他団体からの出向技師の応援を得て対処してきた。協会の公的性格上、速報資料や小さな研究会での発表資料の活用について第三者に特別な制限を設けたことはない。

その結果、しばしば調査担当者以外の技師が整理作業を補助するケースがあり、そのたびに専従職員に大きな負担をかけてきた。本報告書もそのひとつである。調査担当者の寛大さに甘えつつ、本遺跡の報告書作成実務の多くをこなしてきた整理担当者の無形の尽力の大きさについても記しておかねばならない。



写真2 TG232号窯で行われた現地説明会

第II章 位置と環境

第1節 遺跡の位置

大庭寺遺跡は、大阪府堺市大庭寺・小代（おぼでら・こだい）付近一帯に位置する。堺市は大阪府南部に細長く延びる泉州地域の北部域に当たり、市域の西側は大阪湾に面し、大和川によって限られる北側は大阪市、南側は高石市、和泉市、河内長野市、東側は松原市、大阪狭山市などと接する。市域のおおまかな地形は、海岸部に近い北西部に広がる平野部と南東部に広がる丘陵地に分けられるが、大庭寺遺跡はこのうち泉北丘陵と呼称される丘陵地帯に立地している。

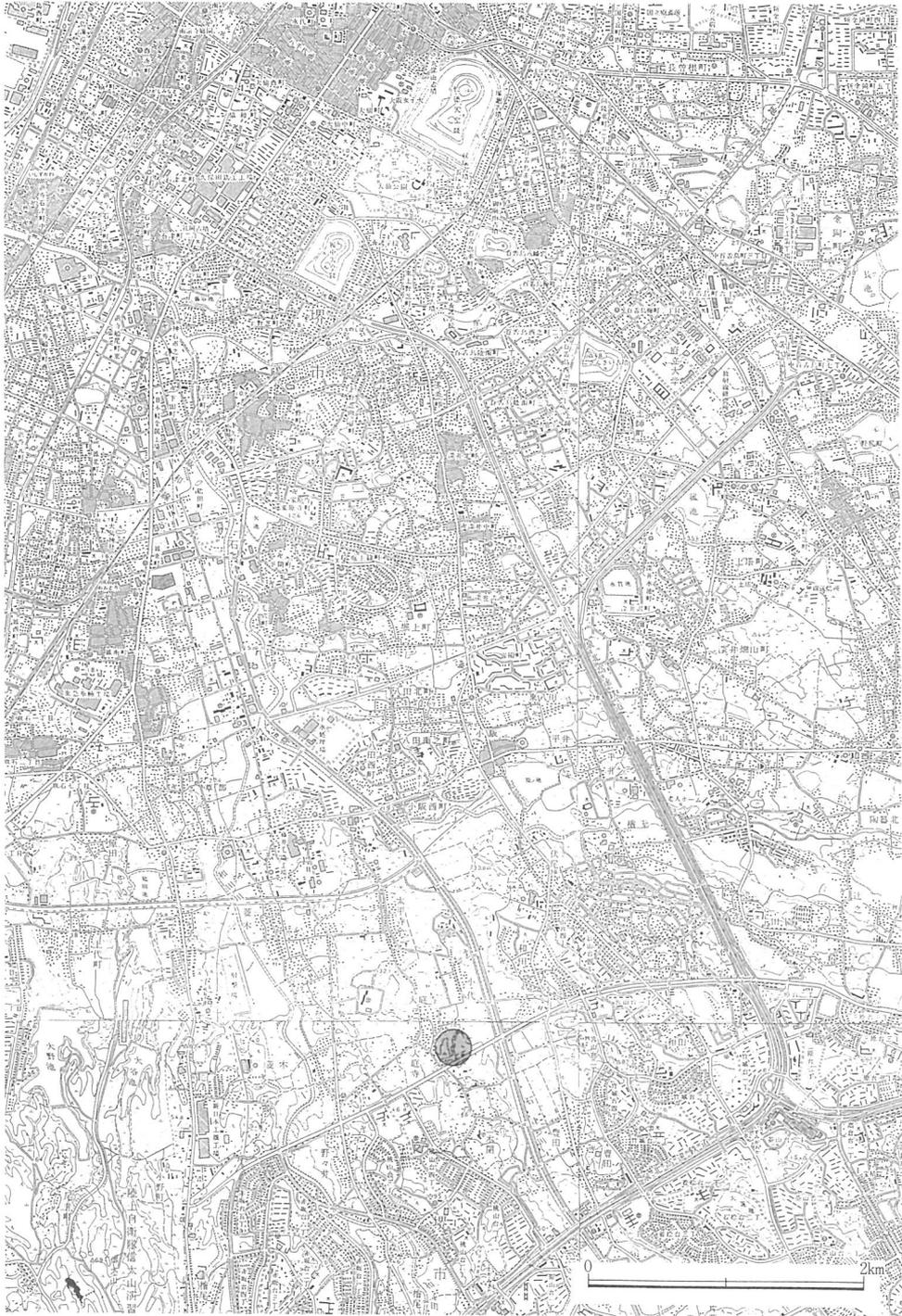
この泉北丘陵は、1960年代からニュータウン開発が進められ、宅地造成や道路建設によって当時の地形は大幅に改変されている。このため、現状ではおおまかにしか開発以前の景観をうかがうことはできない。ただ大庭寺遺跡周辺は、ニュータウン開発の縁辺部であったこともあり、大規模開発による破壊を免れ、高速道路建設以前は比較的当時の景観が良好に残存していた地域である。

第2節 地理的環境

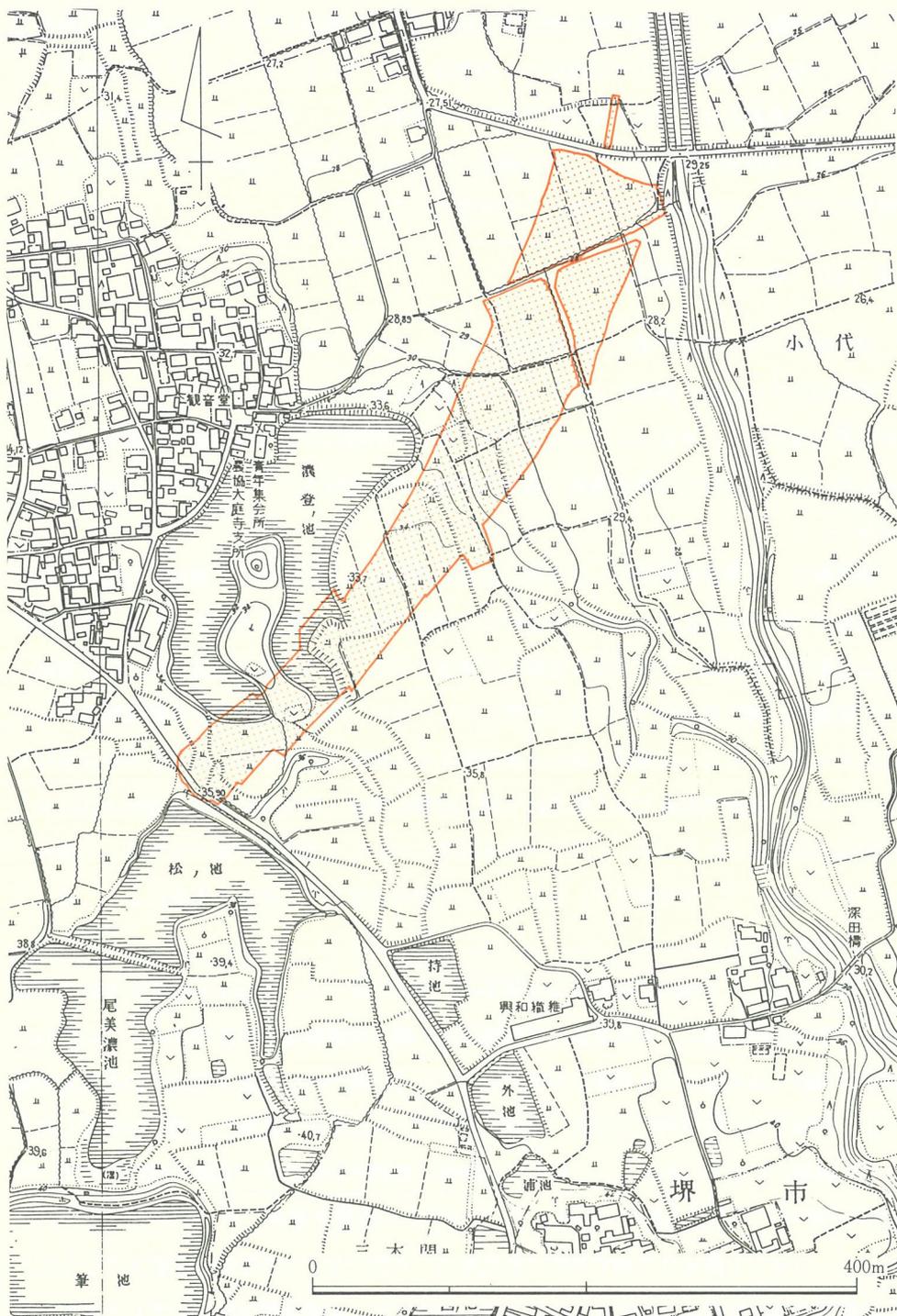
西側を弓状に細長くのびる泉州地域は、西側を大阪湾に面し東側には和歌山県との県境となる和泉山脈が南北に連なっている。この山地を背後にしてその前面には丘陵部、段丘部、平野部が形成されている。特に平野部の発達が顕著に見られる北部域では海岸線に沿って砂州が発達し、段丘との間には後背湿地が形成され、肥沃な生産地としての役割を果たしてきたことがうかがえる。丘陵は和泉山脈から派生し、数多くの中小河川がこれらの丘陵を開析する。このため、丘陵・段丘部の周辺には河川の開析作用による大小の谷地形が見られ、狭小な沖積地が形成されている。

堺市の南東部に広がる泉北丘陵も、和泉山脈から北西方向に向かって派生し、丘陵の先端部付近は緩やかな傾斜をもつ段丘地形となり平野部へとつながる。泉北丘陵の標高は丘陵部で約50～80mである。丘陵や段丘の間は、蛇行しながら走る石津川やその支流である和田川、陶器川などによって開析され、中流域では河川周辺に狭小ながら沖積地が形成されている。

第2節 地理的環境



第2圖 大庭寺遺跡位置圖(1988年)



第3図 大庭寺遺跡調査位置図

第3節 考古学的環境

大庭寺遺跡は、この泉北丘陵の椀丘陵と呼称される丘陵からのびる中位段丘から沖積段丘上に立地し、調査範囲も中位段丘から沖積段丘まで及んでいる。これまでの調査によると、この沖積段丘は、遺跡の東端を北流する石津川によって形成された沖積地で、奈良時代には厚い沖積層が形成されたことが確認されている。なお、奈良時代以降は活発な土地開発が行われ、15世紀以降は耕地として利用されている。

第3節 考古学的環境

泉北地域の考古学的成果は、1960年代に始まったニュータウン開発や1980年代に始まった道路建設などに伴う調査によって、多くの蓄積が成されている。ここでは、これらの調査成果を踏まえて、本報告の中心的な時期である古墳時代の大庭寺遺跡の位置を明確にするため、泉北丘陵やその周辺地域（泉州北部域）の弥生時代から古墳時代の様相を概観しておく。

弥生時代 泉州北部地域で、弥生時代前期の遺跡としては石津川下流域に立地する四ツ池遺跡の存在が注目される。四ツ池遺跡は、縄紋時代から継続する集落であり、泉州地域でも比較的早い時期に弥生文化を受容した集落である。一方、泉北地域では、小阪遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡などの存在が知られているが、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡は、出土遺物から判断して四ツ池遺跡に遅れて前期後半から弥生文化を受容したことが推定されている。また、最近の調査では小阪遺跡で縄文晩期の靱痕土器や弥生前期中段階土器の出土が確認され注目されている。しかし、水田開発については遺跡の状況から判断して遅れると予想されている。泉州地域でも弥生文化の受容の過程とその状況は集落によって異なることが看取されよう。

中期になると、全体的に遺跡数は急増する。泉北丘陵でも、前期から継続する鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡の他に、毛穴遺跡、万崎池遺跡、野々井遺跡などが出現する。このうち、西浦橋遺跡では大規模な水利施設が検出されている。地形的に大きく制約される泉北地域でも、耕地開発が積極的に行われ、耕地の拡大とともに集落が拡散し、新たな集落も成立したと推定されよう。しかし、これら泉北地域に展開する集落は、遺跡や遺物の状況、地形的な制約からの生活基盤から判断して、いずれも小規模な集落であったと考えられよう。

一方、石津川下流域に立地する四ツ池遺跡は、中期になると集落規模を拡大させるとともに環濠の機能も備えたと推定される大溝も掘削され、泉州北部地域の中でも大規模な集落として発展していく。四ツ池遺跡と泉北丘陵の集落間には、石津川を媒介として拠点的



第4図 周辺の遺跡分布図（大阪府文化財分布図1991年3月より作成）

な集落と一般集落としての密接な集団関係があったことが予想されよう。

弥生時代でも、中期末から後期になると新たに丘陵上で集落の展開がみられる。高蔵丘陵の伏尾遺跡、梶丘陵の野々井遺跡、信太丘陵の昭和池遺跡などである。これらの集落は、その立地からいわゆる高地性集落との関連が考慮されるが、石鏃などの出土量、集落の様相からは一般集落と考える方が妥当である。

弥生時代末については良好な資料は少ないが、沖積段丘の縁辺部など比較的低位部での展開が予想されよう。

古墳時代 泉北地域における古墳時代前期の集落は確認例が少なく、大庭寺遺跡、伏尾遺跡、野々井遺跡などが代表的な遺跡である。

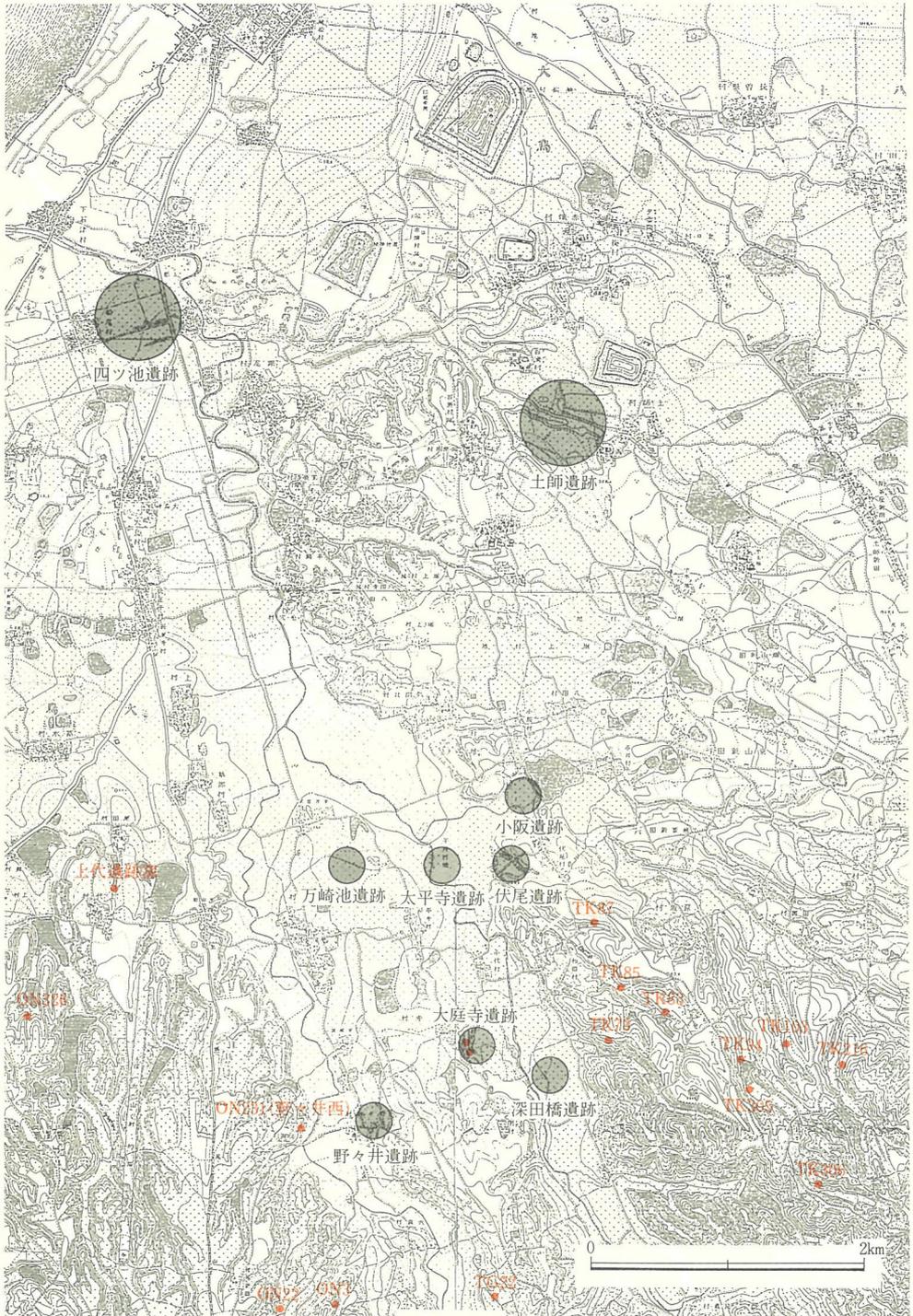
大庭寺遺跡では、布留式土器の古い段階から継続して存続するが、遺構・遺物の様相から判断して集落規模は小規模であったと予想される。一方、伏尾遺跡は、周辺域で中期に属する古墳（小代古墳群）が確認されており、前期においても有力地域集団であった可能性はある。野々井遺跡についても、遺構の検出状況などからは伏尾遺跡と同様の可能性は考えられよう。

古墳については、前期まで遡るものとして、埋葬施設に和泉砂岩製といわれるの割竹形石棺を採用した二本木山古墳が知られている。また、先述したが、小代古墳群も中期でも須恵器出現以前の段階に属し地域首長層の墓とされよう。しかし、泉北地域は、首長層の墓と推定される古墳は確認はされているが、前述した遺跡の集落規模などからは前代同様地域として飛躍的に発展した傾向は見いだすことはできない。

泉北地域が大きく開発されるのは、この地「陶邑」で須恵器生産開始以後であり、全国規模で歴史的舞台上に登場する。

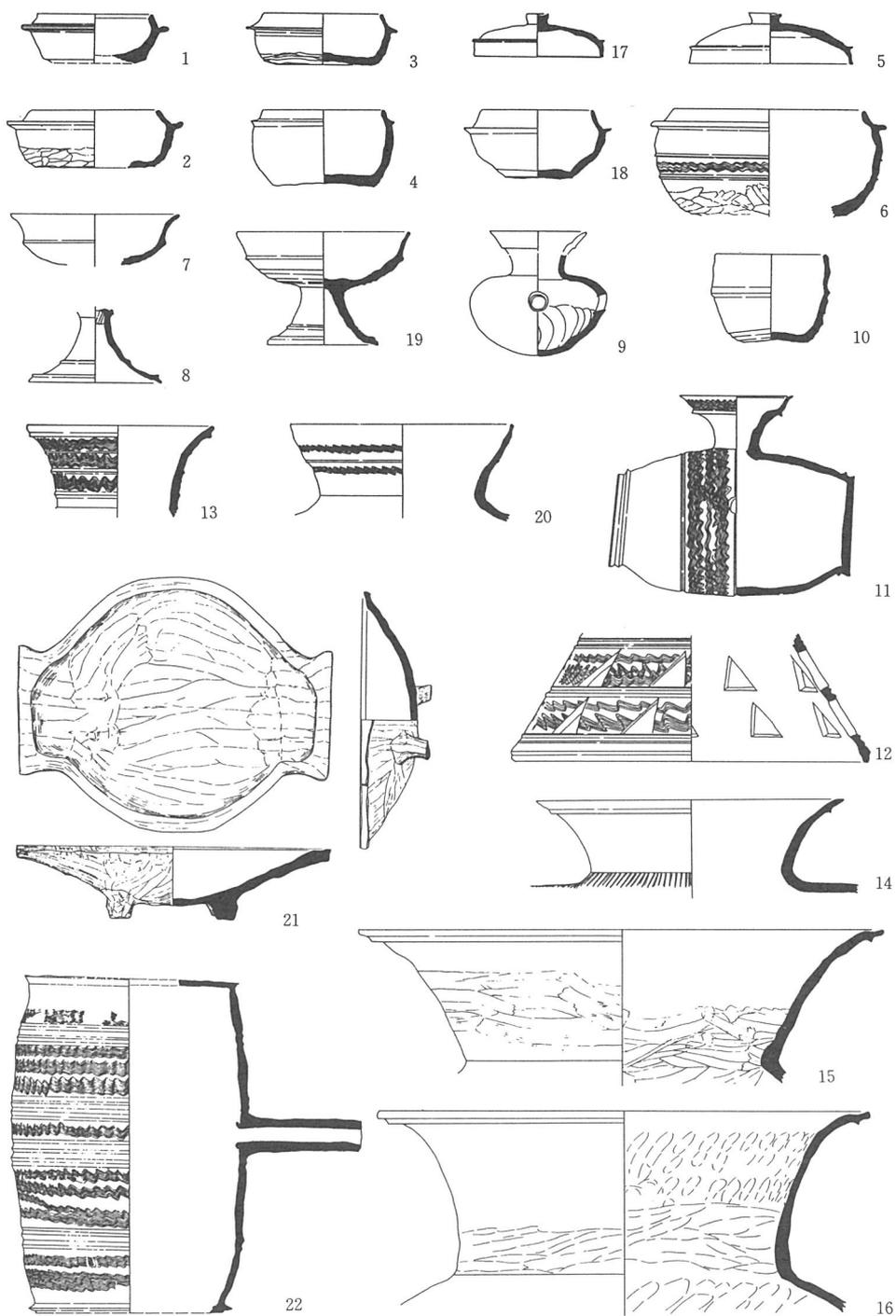
陶邑で生産開始された頃の初期段階の窯としては、T K 73号窯、T K 85窯、濁り池窯などが知られていた。しかし、大庭寺遺跡でより陶質土器に近い製品が生産されたことが確認され、須恵器生産導入期の窯が陶邑の中にも存在したことが明らかとなり、須恵器のはじまりについて大きな問題を投げかけた。また、近年の調査では、大庭寺遺跡だけでなく高蔵地区ではT K 216型式からT K 208型式の初期須恵器を伴う伏尾遺跡、T K 73型式併行期に出現する小阪遺跡など、須恵器生産に関係したと考えられる集落の資料も蓄積された。陶邑の成立過程を窯や遺物からだけでなく、集落の動向から解明することも可能となった。

特に伏尾遺跡では、丘陵上で掘立柱建物を中心に大きく展開する集落と、方墳を中心に構成される古墳群も検出され、伏尾集団の中にはこれら集落を統括する首長層の存在が予



第5図 主要な初期須恵器窯と周辺集落

第3節 考古学的環境



第6図 代表的な初期須恵器 (S=1/6, TK73 1~16, TK85 17~20, TK87 21~22, 『陶邑III』より作成)

想された。さらに、伏尾遺跡では深田遺跡にみられるような流通に関連したと考えられる遺構群も確認され、集落規模や構造、古墳群の形成も考え合わせると、伏尾遺跡の状況が発展した陶邑の様相を端的に示すものとして理解された。一方、小阪遺跡は、竪穴住居数棟で構成される小規模集落である。立地も、陶器川によって形成された沖積平野の微高地上にあり、集落の展開を考えると良好な場所とは言えない。出土遺物も伏尾遺跡に比べると渡来人との関係がうかがえる軟質系土器の出土が顕著であった。小阪遺跡は、集落の出現時期、立地、規模などの集落構造、遺物の様相は伏尾遺跡とは異なり、発展途上における陶邑の一様相を示すものとして理解される。

このように、揺籃期における陶邑の集落にみられる特徴は、出現の時期によって違いがあり、各集落の様相から、急速度で拡大、発展していく陶邑の成立過程を読み取ることが可能である。

その他、陶邑の成立に関連しては、周辺遺跡の動向も重要視される。前述の集落や窯の立地からは、その開発は泉北地域の丘陵部でも比較的前縁部から始まる。さらに石津川やその支流である和田川などの河川が、交通路あるいは流通路として、重要な役割を果たしたことが推定され、石津川下流域に立地する集落との関係が注目されよう。

つまり、須恵器生産の導入を考えた場合、その始まりには中央権力の他に地域の有力勢



写真3 陶邑上空からのぞむ百舌鳥古墳群

力も大きく関与していたと考えられるが、その勢力は須恵器導入以前の集落の様相などから泉北地域に求めるより下流域の四ツ池遺跡などを中心とした地域に求める方が妥当である。また、泉北地域にも前代からの農耕を生産基盤とする伝統的な集落の存在も知られている。これらの中には須恵器生産に間接的な関与の可能性を示す集落もあるが、多くは不明である。須恵器生産が拡大し、泉北地域が開発されていく中での伝統的な集落の動向は検討課題として残されている。

須恵器生産技術が導入されて以後、泉北地域は大きく開発され発展して行く。窯や集落も増加し、これに伴い造墓活動も活発化しカマド塚と称される檜尾古墳群、陶器千塚など特異な形態の古墳も出現してくる。広く陶邑の中に、須恵器生産を基盤とした社会的位置が確立されたと理解されよう。しかしその反面、大庭寺遺跡周辺の堆積状況からは陶邑の発展と裏腹に森林伐採などが急速度で進んだこともうかがえる。発展の代償として大きな自然破壊が行われたことも、泉北地域の歴史の中では、重要な事実として受け止めなくてはならない。

- 註1. 岡戸哲紀「揺籃期の陶邑—集落の動向からみた陶邑の成立過程—」『文化財学論集』1994年
2. a. 財大阪文化財センター・大阪府教育委員会『小阪遺跡』1992年
b. 三宮昌弘「初期須恵器製作集団と韓式系土器」『韓式系土器研究II』1989年
 3. a. 財大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会『陶邑・伏尾遺跡A地区』1990年
b. 財大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会『陶邑・伏尾遺跡A地区II』1990年
c. 岡戸哲紀「陶邑・伏尾遺跡の検討」『韓式系土器研究III』1991年
 4. 小野久隆「伏尾遺跡の調査概要」『第26回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』1992年
 5. 近年調査された四ツ池遺跡に隣接する下田遺跡などの調査などが注目される。仁木昭夫・西村歩「銅鐸と古墳時代の木製品—大阪府堺市下田遺跡—」『季刊考古学第50号』1995年
 6. 財大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会『陶邑・大庭寺遺跡』1989年

第III章 調査概要

第1節 調査の方法

調査区の設定（第7図）

大庭寺遺跡の発掘調査区は、水路、里道、溜池などによって分断され、調査年度によって調査区を設定している。このため、第7図に示した通り煩雑な状況を呈する結果となっている。発掘調査報告書も調査年次を基本とし、調査時点で設定した調査区名を踏襲し随時刊行している。以下、報告書と報告調査区の関係性を明記しておく。

第41輯『陶邑・大庭寺遺跡』1989年——調査地A・B・C

第50輯『陶邑・大庭寺遺跡II』1990年——I区-A・B, II区, III区-A・B
IV区-A~D, V区

第75輯『陶邑・大庭寺遺跡III』1993年——I区-C・D・E

第90輯『陶邑・大庭寺遺跡IV』1995年——VI区-A・B

『陶邑・大庭寺遺跡V』（未刊）——VII区, VIII区, IX区, 10~14区

調査区内の地区割り（第8・12図）

当協会では、発掘調査・整理事業の一定の基準を定め調査規程を作成し、調査の標準化を行っている。この規程により調査区の地区割りも、以下の通りに行っている。（第8図参照）

まず、遺跡の位置は新平面直角座標の第VI座標系を使用して表示する。

遺跡内の地区割り（区画割り）は1/2500の地形図を12等分して500m×500mの区画をつくり、A~Lまでの記号で示す。次に500m×500mの区画を25等分して100m×100mの区画をつくり、01から25までの数字で示す。さらに100m×100mの区画を625等分し4m×4mの区画をつくる。この4m×4mの区画は列・行の順で2文字のアルファベットで示す。第8図の斜線部は大E-5-5-K22TIである。

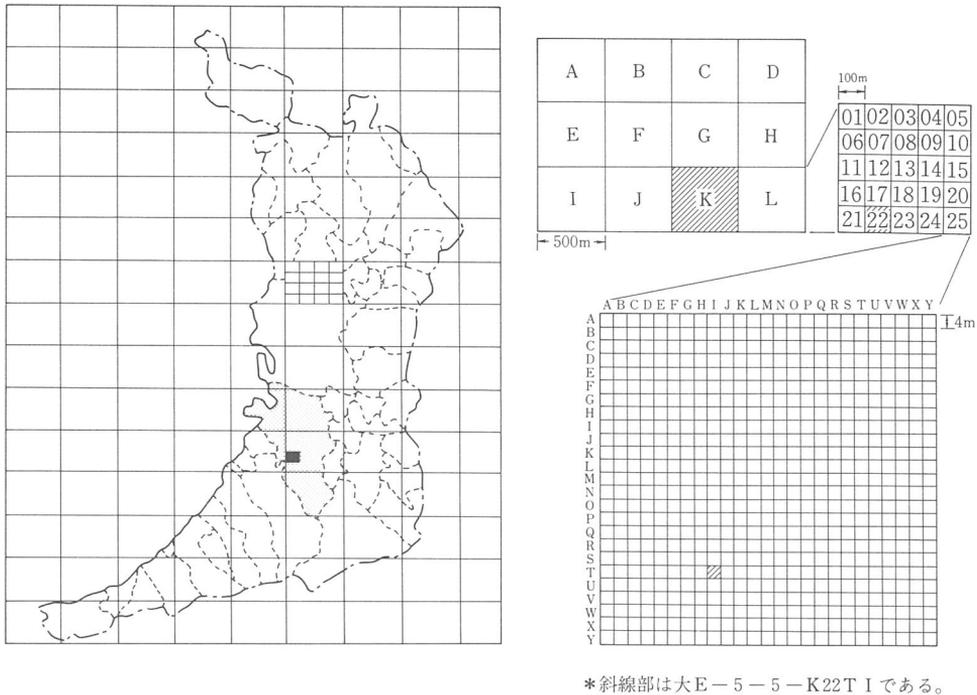
遺物の取り上げ

遺物の取り上げは、上記の地区割りを基本とし、4m×4mの単位で行っている。

第1節 調査の方法



第7図 調査区割全体図



*斜線部は大E-5-5-K22T Iである。

第8図 調査地区割模式図

遺構番号

遺構番号は各調査区毎に1番から連続して与えている。しかし、溝や河川など複数調査区に渡って検出される遺構もある。これらの遺構についても調査時点では、調査区毎の連続遺構番号を与えている。しかし、本報告では煩雑化を避けるため、既刊の報告書で報告済みの遺構については報告書に従い、未報告遺構については新たな遺構番号を付加する。本報告で変更される遺構番号は以下の通りである。

Ⅵ区B・14区 27-OK→TG231号窯

Ⅵ区B28-OK→TG232号窯

Ⅵ区B29-OK→TG233号窯

10区40-OR→56-OR

10区41-OS→601-OS

12区1-OS→1001-OS

13区1-OS→1002-OS

Ⅷ区谷部→1-OL

Ⅸ区谷部→393-OL

12区谷部→2-OL

13区谷部→2-OL

14区谷部→2-OL

須恵器窯は、協会の規程に従い遺構番号を付加したが、大阪府教育委員会によって付加された陶邑窯跡群の窯番号を採用している。

第2節 調査地の地形

遺構の種類

遺構の性格を示す記号は以下の通り定めている。

OR (河川) OB (建物) OD (堅穴住居) OK (窯) OO (土坑)
OP (ピット) OS (溝) OL (池・谷)

遺跡の図面

図面は航空測量を実施し、調査地全域で1/20・1/100の平面図を作成している。また調査中には遺跡の細部の情報を得るため、遺物出土状況・土層断面図などの図面を適宜作成している。

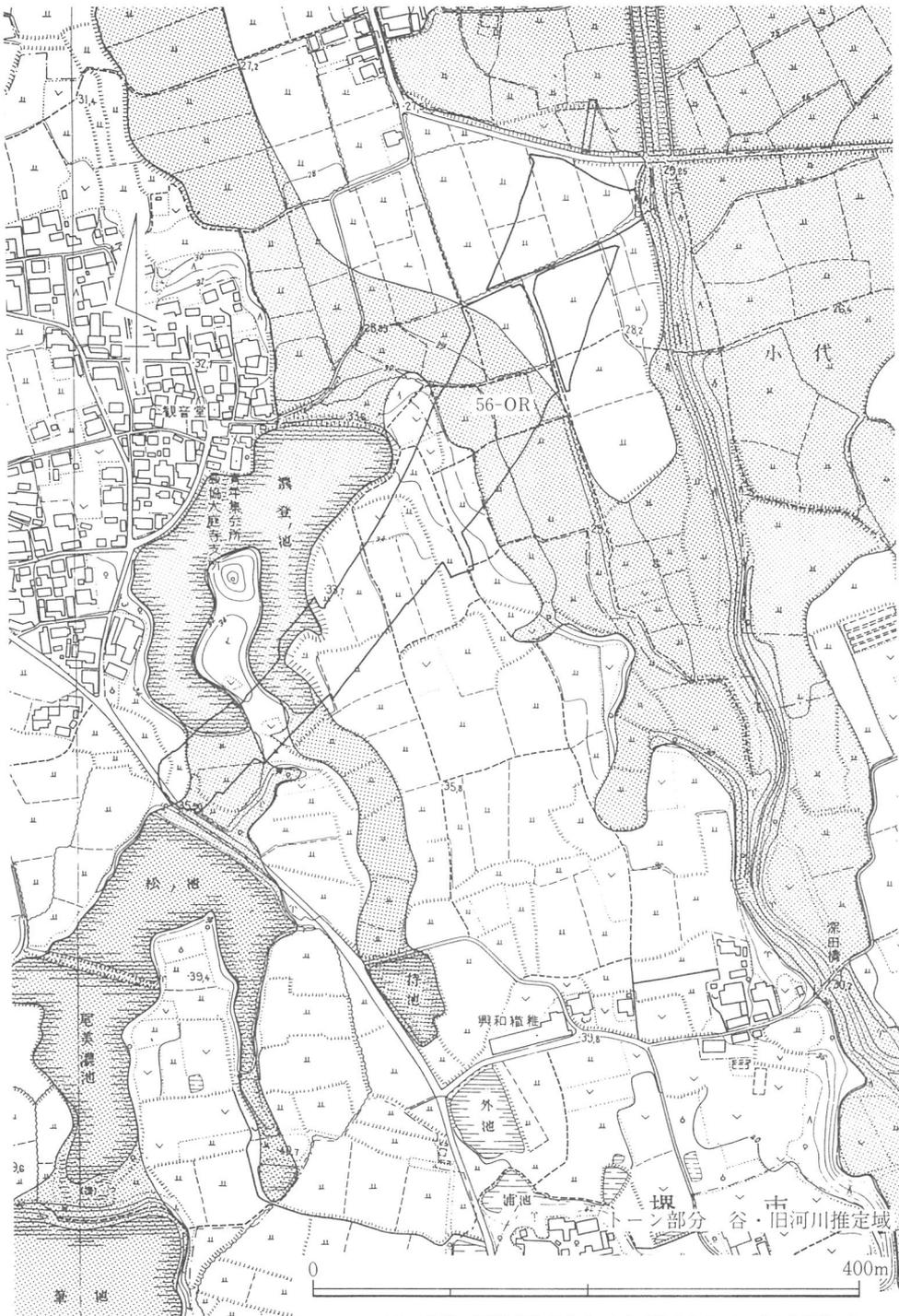
第2節 調査地の地形 (第9・10・11図)

大庭寺遺跡は、大阪府文化財分布図によれば東西1.5km、南北2kmの規模を有し、泉北丘陵中の榎丘陵と呼称される丘陵地の東側縁辺部から、遺跡の北側を流れる石津川によって形成された沖積段丘面にかけて広がっている。

遺跡の展開する丘陵地は標高30～34mを測る。地形分類によると中位段丘面に分類され、現在濃登ノ池などの溜池として利用されている開析谷が刻まれている。この開析谷は、石津川に近い開口部付近では幅約100mを測る1本の谷であるが、奥部では2本に枝別れしさらに丘陵奥へとのび、遺跡を二分している。沖積段丘面は、石津川の本流によって形成され、深田付近では右岸での、大庭寺遺跡周辺では左岸での発達が見られる。大庭寺付近での標高は約28mを測り、河川に向かって緩やかに傾斜している。

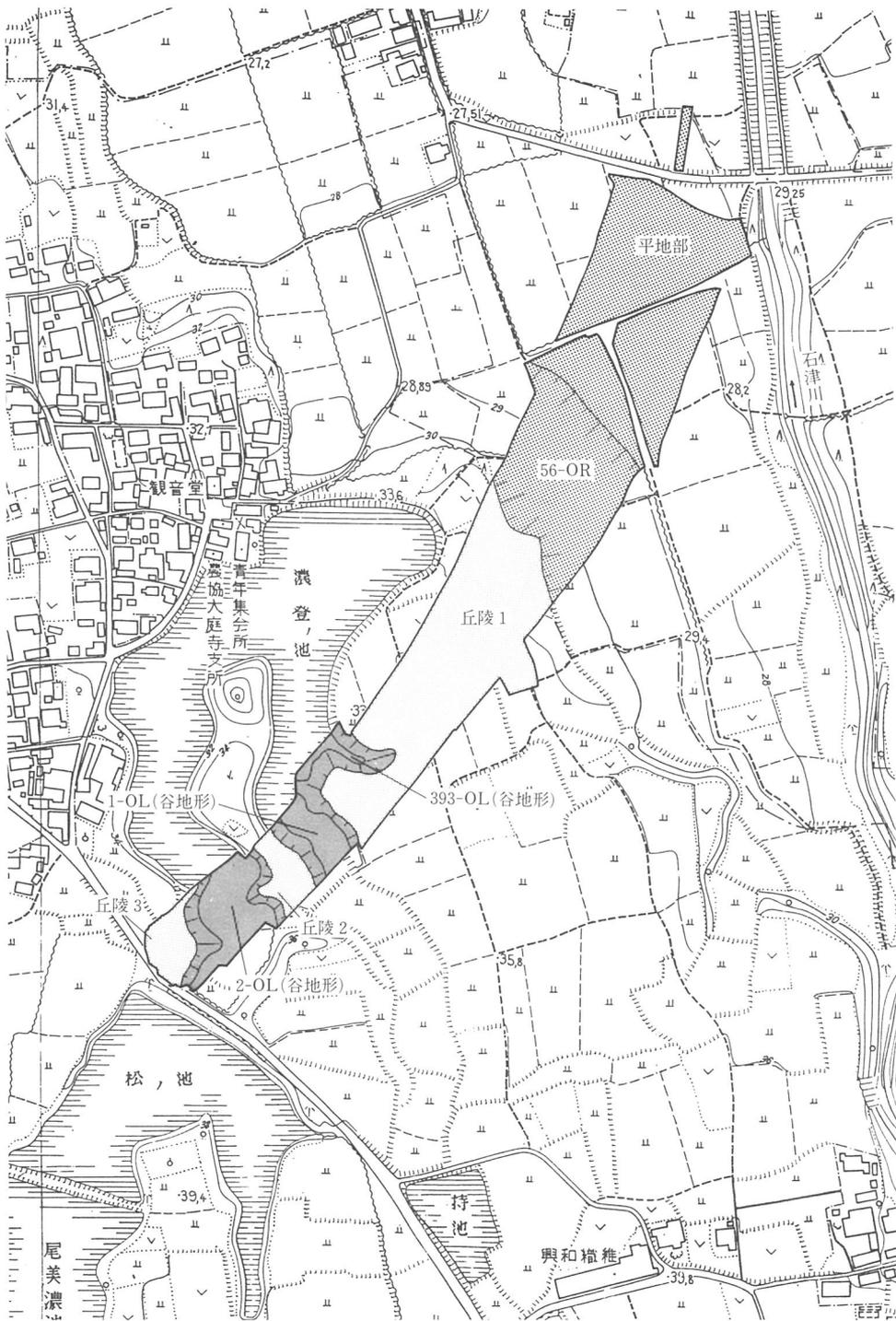
このような場所に展開する大庭寺遺跡における当協会の調査は、道路建設予定地を対象としたため、遺跡中心部を総延長約550mではぼ南北に貫く形で行っている。そのため調査は沖積段丘面やその下層、開析谷の南側に広がる中位段丘面の丘陵部、開析谷などに及んでいる。

なお、当報告書では、調査地の地形が多岐に渡るため、便宜上第10図に示した略称によって地形の表現を行っている。



第9図 大庭寺遺跡周辺の谷地形

第2節 調査地の地形



第10図 調査区の地形

第3節 既往の調査（第7・11・12図）

1986年度の調査（試掘調査）

1986年度は、近畿自動車道松原・すさみ線建設予定地内の小代から大庭寺、野々井、檜尾地区に至る全長約3 kmに81箇所のグリッドを設定し、試掘調査を実施した。

その結果、大庭寺遺跡の広がる小代・大庭寺地区では、石津川寄りの沖積地で古墳時代から中世に至る遺物包含層や古墳時代の旧河川、奈良時代の柱穴などの遺構の存在が確認された。さらに、中位段丘面の丘陵地では、古墳時代の溝や柱穴、古墳時代から奈良時代の遺物が出土した。この調査結果により大庭寺遺跡では、調査予定地全域に遺構が広がることが明らかとなった。

1987年度の調査（1987年度調査区A・B・C区）

石津川西岸に広がる沖積地の調査で、縄紋時代から古墳時代に至る石津川の旧河道、弥生時代から中世に至る遺構を検出した。

石津川の旧河道については、縄紋時代は不明な部分が多いが、弥生時代から古墳時代にかけては幅約60m、深さ約4～5 mを測り、奈良時代には完全に沖積平地化したことが確認されている。河道内からは弥生土器や須恵器など多量の遺物が出土しているが、特に出土須恵器の中には、これまで陶邑では確認されていなかった形態をもつ初期須恵器が含まれており注目をあつめた。弥生時代や古墳時代の遺構は、この河道の縁辺部で検出されている。弥生時代では中期の溝や後期に属する竪穴住居が2棟確認されている。古墳時代では前期の井戸、後期の溝などが確認されている。

奈良時代では比較的まとまった形で集落の一部が確認された。倉庫を含む掘立柱建物が12棟、木組みの井戸が1基確認され、井戸内からは「上」「清水」「水」と墨書された土器も出土している。

鎌倉時代（13世紀）の集落は、幅約2 m、深さ約1～1.5mの溝で、「コ」の字形に区画されていた。区画の規模は東西1町、南北1町以上が推定されている。区画内には中小の溝によって区画された主要な掘立柱建物群や竈を付属施設として有する掘立柱建物、井戸、土坑などが配されていた。また、この集落は15世紀にはすでに廃絶し、15世紀以降は耕作地として土地利用がなされている。

当年の調査成果は第41輯『陶邑・大庭寺遺跡』で報告されている。

第3節 既往の調査

1988年度の調査（Ⅰ区－A，Ⅱ区，Ⅲ区－A・B，Ⅳ区－A・B・C，Ⅴ区）

石津川西岸の沖積地と新たに丘陵部1の調査を行っている。沖積地（Ⅱ～Ⅴ区）では、弥生時代中期の溝や後期の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物、鎌倉時代の区画溝などが検出され、前年度の調査成果と合わせて沖積地における遺跡の展開がより一層明確となった。

丘陵部1の調査範囲は、鞍部東半部とその斜面部に及んでいる。鞍部（Ⅰ区）は後世の削平を受けていたが、初期須恵器を出土する古墳時代中期の土坑、古墳時代中期から後期に及ぶ掘立柱建物群、古墳時代後期の土坑や溝などが検出されている。古墳時代中期の遺構は散在的に分布し全体状況は把握しにくい、後期の遺構群は掘立柱建物を中心に丘陵鞍部全域に広がる様相を呈していた。

斜面部は、削平を免れたため良好な状況で遺構が検出され、古墳時代中期から平安時代に至る集落の様相が明らかとなった。古墳時代中期の遺構には、初期須恵器を出土する竪穴住居2棟を始めとして、甕を数個並べた溝（601－O S）や須恵器・軟質系土器が多量に出土した土坑などがあり、集落の一端が明らかとなってきた。古墳時代後期では沖積地で検出された旧河道（56－O R）に向かってのびる溝や掘立柱建物などが検出されているが、掘立柱建物の分布状況は丘陵部に比べて希薄で、斜面部は後期集落の縁辺部にあたるものが予想された。奈良時代では掘立柱建物が19棟検出され、沖積地で確認された建物群とは別の一群が存在することが明らかとなった。また、この一群の出土遺物には瓦や磚伝なども含まれ、沖積地の一群とは遺物の様相は異なっていた。平安時代では当調査区で初めて掘立柱建物が9棟検出され集落動向が明らかとなった。

当年の調査成果は第50輯『陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ』で報告されている。

1989年度の調査（Ⅰ区－B，Ⅳ区－D）

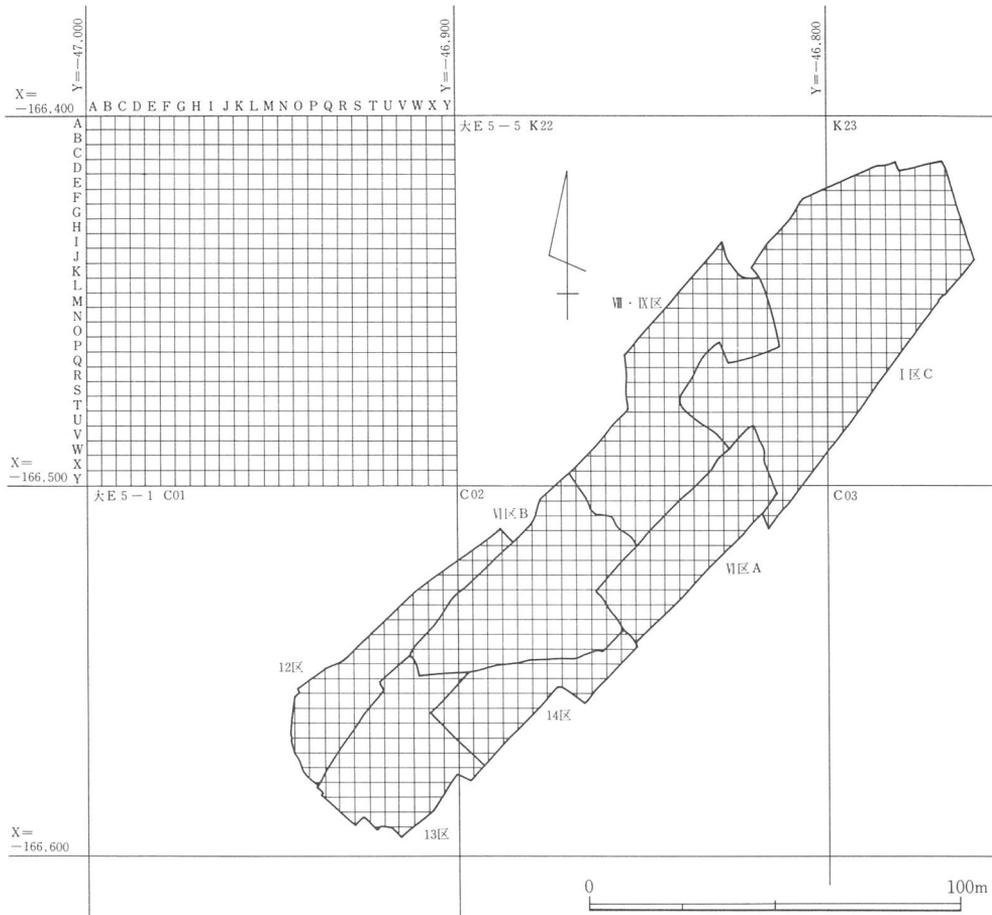
丘陵1の東半部と沖積地の未調査区の追加調査である。丘陵部1（Ⅰ区）では古墳時代の掘立柱建物7棟が検出され、前年度予想された集落の広がりが確認された。また、奈良時代の掘立柱建物も2棟確認され、鞍部にも別の一群が存在し、奈良時代の集落がさらに大きな広がりを見せることも明らかとなった。

沖積地（Ⅳ区）では、小規模な弥生時代の溝が数条検出されているが、集落に直接関連するような住居などは確認されていない。

当年の調査成果は前年度の成果と合わせて第50輯『陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ』で報告されている。



第11図 古墳時代の遺構と地形断面図



第12図 1990～1992年度調査区割図

1990年度の調査（I区-C・D・E，VI区-A）

丘陵1の西半部（I区-C）の鞍部と小規模な開析谷，丘陵1の東側斜面（I区-D・E），谷地形1-O L（VI区-A）の調査を行っている。

丘陵1（I区-C）では古墳時代や奈良・平安時代の掘立柱建物，初期須恵器が出土する土坑，削平されていて確実ではないが後期の古墳の可能性のあるものが2基確認されている。小規模な開析谷は393-O Lと呼称されているもので，多量の初期須恵器や軟質系土器が出土している。また，出土した初期須恵器の中には焼き歪み製品などの不良製品も多く含まれ，近辺に当期の窯の存在が確実視された。

斜面部の調査では狭い調査面積ながら，これまでの調査成果とあわせて，古墳時代中期と奈良時代の集落の様相がより一層明確となってきた。古墳時代中期では，初期須恵器を

第4節 1991年度以降の調査概要

伴う数棟の竪穴住居や溝、土坑が検出され、この周辺が居住域の中心に当たることが判明した。前述の通り、開析谷の調査成果から窯の存在も予想され、居住域も確認されたことにより、須恵器生産集団の集落構造が明確にされてきた。奈良時代では掘立柱建物の資料を数棟追加したに過ぎなかったが、これまでの調査成果とあわせて建物配置を復元すると、大庭寺遺跡の中でこの一群のみが整然とした配置を取ることが明らかとなった。さらに、出土遺物では、瓦類の出土がこの一群で顕著であることもうかがえた。つまり、遺構配置や遺物の様相は、他群に比べ卓越した特徴を有し、この一群が大庭寺遺跡の中でも中心的な存在であったことが推定された。

1-O-L (VI区-A) の調査は部分的なものであったが、東側斜面の一部で初期須恵器や軟質系土器による土器溜りが検出された。この土器溜りから出土した初期須恵器は、393-O-L出土のものよりも後出型式のものが多く含まれており、須恵器生産の発展・展開を考える上で良好な資料となった。

当年の調査のうちI区-C・D・Eについては第78輯『陶邑・大庭寺遺跡III』、VI区-Aについては当報告書で行っている。

以上のように、大庭寺遺跡では1986～1990年の調査により、縄紋時代から中世に至る遺構・遺物が検出され、各時期の集落の構造や当時の人々の営みが明らかとなってきた。特に、古墳時代中期の遺構には多くの初期須恵器や軟質系土器が伴い、大庭寺ムラが渡来系の須恵器生産集団によって成立、発展したことが判明した。また、大規模に調査が行われたことにより集落構造も把握され始め、窯や遺物からだけでなく、集落からの陶邑成立の諸問題を解明していくことが可能となってきた。

第4節 1991年度以降の調査概要 (第11図)

1991年度調査の概要 (第11図)

1991年度は、現在溜池として利用されている谷地形部 (VI区-B, VIII区, IX区) の調査を中心に行い、沖積地については部分的に残存した調査区 (VII区) の追加調査を行った。

谷地形部については、前年度調査した1-O-L (VIII区) と小規模な開析谷393-O-L (IX区) の残存部分と新たに2-O-L (VI区-B) の調査を行っている。

1-O-L・393-O-Lについては、前年度の調査によりその概要は把握されていたが、当年の調査により、弥生時代から近世に至る土地開発の過程がより一層明確となった。2

一〇Lは、谷地形の東半部の調査であったが、これまでの調査によって予想されていた初期須恵器窯が2基確認され注目された。いずれの窯も窯本体は残存していなかったが、灰原は残存していた。特にTG232号窯の灰原は上層に6世紀末頃のTG233号窯灰原が存在したため、良好な状況で検出されている。また、この初期須恵器窯の遺物には、形態・技法的に朝鮮半島の陶質土器の影響が色濃く反映した特徴をもつものが多く含まれており、初期須恵器に関わる諸問題を解明する上で重要な資料となった。なお、TG231号窯については、調査区の関係上、灰原の約1/2を検出したに留まり、全容の把握は翌年度（1992年度）の調査に委ねられた。

当年の調査のうち本報告ではTG232号窯・TG233号窯について行っている。TG231号窯および他の調査区については『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』で報告を予定している。

1992年度調査の概要（第13・14図）

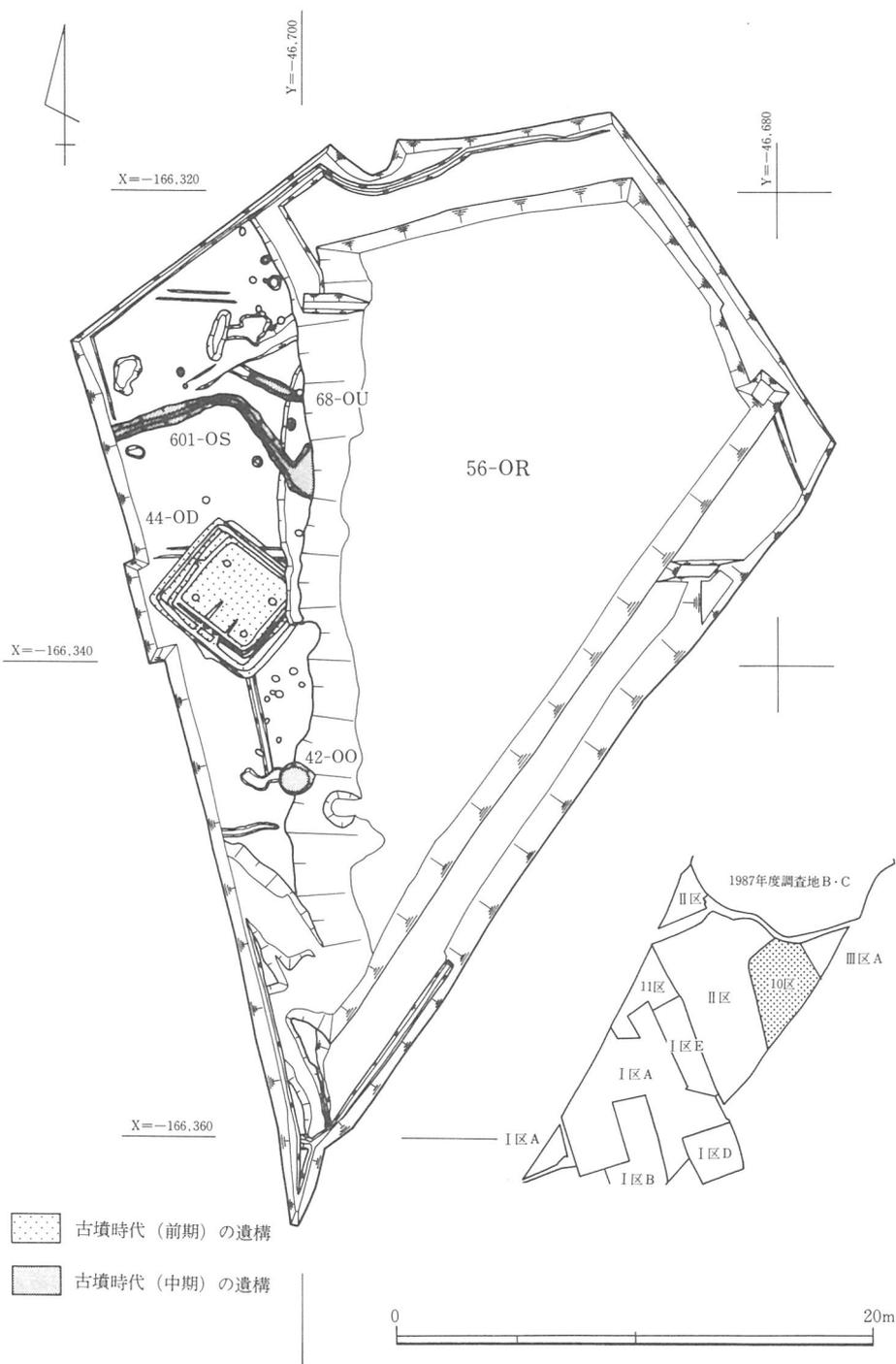
1992年度は、大庭寺遺跡の調査最終年度で、丘陵1の東斜面の未調査区（10・11区）と丘陵2、2-OL（12～14区）の調査を行っている。

10区は丘陵の縁辺部に当たり、沖積地で検出した旧河道56-ORの西岸肩部が確認されている。河道内からは多量の遺物が出土しているが、特に肩部からは6世紀前半の須恵器や土師器が一括投棄された状況で検出された。丘陵部は、古墳時代中期には居住域の場所に当たり、今回の調査でも溝や井戸の可能性のある土坑などが検出されている。溝は河川に向かってのびているが、II区で検出されている601-OSと連続することが確認された。さらにこの溝は、竪穴住居を中心とした遺構の分布状況から、居住域を区画する溝であることも明らかとなった。また、溝外では河原石で蓋をした壺を供献した土壌墓が確認されている。古墳時代中期遺構群の他にも、10区では古墳時代前期の竪穴住居や後期の溝なども検出されている。

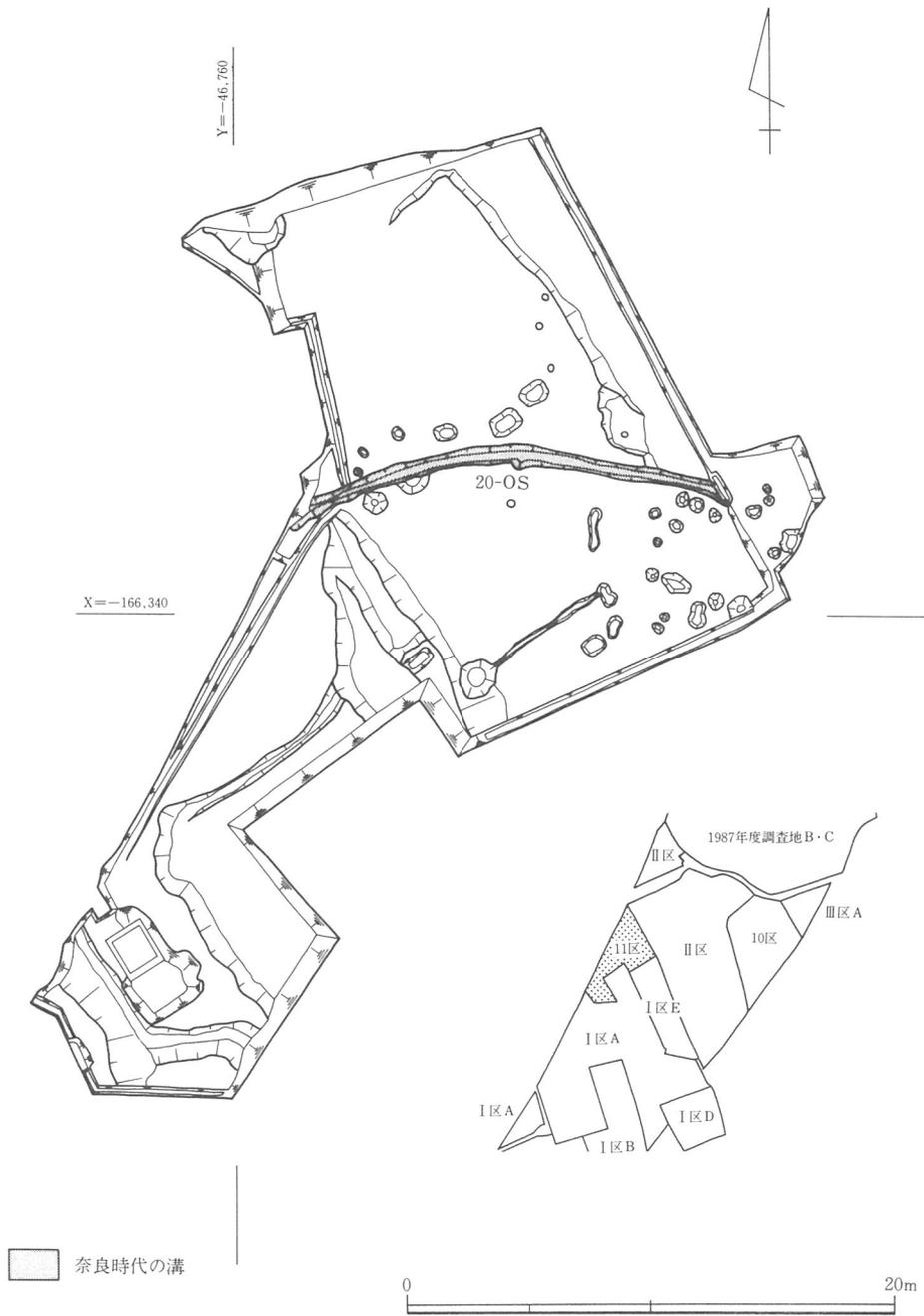
11区は、古墳時代中期の竪穴住居や奈良時代の建物群が検出された調査区（I区-E）の西側に位置する。古墳時代中期には居住域外と推定され、奈良時代の溝が1条検出されたのみである。ただ、この溝は、人工的に掘削されたもので、現在溜池として利用されている谷地形からのびることなどから、奈良時代の開発に伴う水利に関連するものと考えられた。また、この溝の東側に位置する建物群との関連も注目されよう。

12区・13区の調査範囲は谷状地形2-OLと丘陵3に及んでいる。丘陵は後世の削平が著しく、中世以前の顕著な遺構は検出されていない。谷地形部では、丘陵の下端に沿って

第4節 1991年度以降の調査概要



第13図 第10調査区遺構図



第14図 第11調査区遺構図

第5節 財団法人 大阪文化財センターの調査

走る古墳時代後期の溝や谷底を蛇行しながら走る弥生時代から古墳時代後期に至る自然の流路が検出されている。前者の溝は人工的に掘削されたもので、谷の開口部に向かってのびると推定されることから水利に関係した溝と推定された。初期須恵器については両調査区ともほとんど出土しておらず、2基の窯の灰原が形成された当谷地形部が、古墳時代中期における集落の西端と言える。

14区では1991年度に確認したT G 231号窯の継続調査を行った。窯本体は部分的にでも残存していることが期待されたが、残念ながら後世の開発によって完全に削平されていた。しかし、灰原については全体が把握された。T G 232号窯に比べ、小規模な灰原で遺物の出土量も少なかったが、出土須恵器の様相は基本的にT G 232号窯と同様に陶質土器の影響を色濃く反映した特徴をもつものであった。ただ、細部の形態や器種構成の上では差異もみられ、2基の窯経営の関係が問題視されている。

当年の報告については『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』で報告予定である。

第5節 財団法人 大阪文化財センターの調査

大庭寺遺跡は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会（以下協会）だけでなく財団法人大阪文化財センター（以下センター）でも調査を行っている。両組織の調査も近畿自動車道の建設に伴うもので、協会が遺跡内予定地の東側半分、センターが西側半分を担当している。

センターの調査区で確認されたものには、古墳時代後期や奈良時代の集落、窯跡、土壌群などがある。特に奈良時代の建物群が検出されたことによって、当期の集落が大規模に展開されたことが明らかとなった。一方、初期須恵器を伴う遺構は、センターの調査区では検出されていない。古墳時代中期の集落は、協会調査区に存在する2-O Lが西端に当たることが、センターの調査成果からも証明された。

第IV章 第VI-A調査区の調査成果

第1節 1-O-Lの調査概要

第1項 概要（第10・15図，図版3～5）

濃登ノ池として残存する開析谷は、開口部から約110m丘陵奥部に入った地点で、2本に枝分かれする。1-O-Lと呼称したこの開析谷は、2本に枝分かれしたものの内、東側に位置するものである。1-O-Lは現在は宅地や道路などによって地形は大きく改変されているが、地形図などから旧地形を探ると、調査地点から幅を徐々に狭めながら、さらに丘陵奥部にのびることが看取できる。調査地点は開析谷全体で見れば、比較的開口部に近い場所に当たり、調査はこの谷を東西に横断する形で行っている。

調査地点での幅は上端部で約35m、下端部で約16m、比高差は丘陵1側で約4.2m、丘陵2側で約2.5mを測る。谷の底面は比較的平坦で、開口部に向かって徐々に低くなる。この面を遺構面として、弥生時代後期の遺物を出土する自然流路が蛇行して走るが、この溝は古墳時代にはすでに埋没しているようである。また、調査地の南端、丘陵1側斜面部では、古墳時代中期の須恵器を中心とした土器が集中して出土した土器溜りが検出されている。

谷の堆積土は、谷の中央部で約1.2mの厚さを測る。おおまかな堆積状況は、中央部では水平な堆積、斜面部では丘陵部方向からの堆積が観察された。以下、時代を追って堆積状況の詳説を行っておく（第15図参照）。

弥生時代の堆積は谷底を走る自然流路内で確認されている。いずれの溝も褐色系の粗砂の堆積がみられ、埋没時期は出土遺物から後期に属すると考えられる。また、この溝のベースとなる土は、青灰色のシルトや微砂・細砂層で構成されるが、遺物の出土はみられなかった。

古墳時代の堆積層は第V～VII層である。第VI層と第VII層は、丘陵の斜面の下端付近のみに認められ平坦な谷底には認められない。平面的な広がりでは第VI層は丘陵1・2の両斜面に認められるが、第VII層は丘陵1側にのみに認められた。層厚も丘陵1側が厚く、丘陵方向から斜面堆積の状況が良好に観察される。これは、丘陵1上に展開する集落に伴う開発が大きく関係しているものと考えられる。実際、遺物の出土も丘陵1側で顕著であった。

第1節 1-O Lの調査概要

また、丘陵1側でも層厚の厚い地点と薄い地点があるが、総じて調査区の北側に向かって薄くなる傾向が見られた。堆積時期は出土遺物より第Ⅶ層が中期、第Ⅴ層が中期～後期と考えられる。第Ⅴ層は古墳時代後期から古墳時代末の堆積層である。褐色系の砂層で、谷の底面に厚さ約15～20cmで、ほぼ水平に堆積している。

第Ⅳ層は中世の堆積層で、両斜面部から谷底部全体に広がる。谷底部は、褐色系粘土の水平堆積が認められ、丘陵2斜面部では谷底部からの連続する褐色系粘土の堆積が約40cmの厚さで認められる。また、谷底部では畔状に盛り上がる層（6層）も存在している。堆積土質や畔状に盛り上がる層の存在、丘陵2斜面部の堆積状況から、第Ⅴ層は耕作地開発に伴う人為的な整地層の可能性が指摘される。ただ、丘陵1側の斜面部の堆積には（7～18層）、丘陵を形成する黄色の砂礫を含む褐色系粘質土の堆積が認められ、その堆積状況からは、自然堆積の可能性も考えられる。

第Ⅲ層は近世の堆積層で、暗褐色系粘土の水平堆積が認められる。層厚は中央部で約50cmを測り、植物遺体を多く含んでいた。おそらく近世以後の溜池に伴い、渇水期には湿地化していたのであろう。

第Ⅱ層は現代の溜池に伴う堆積層である。

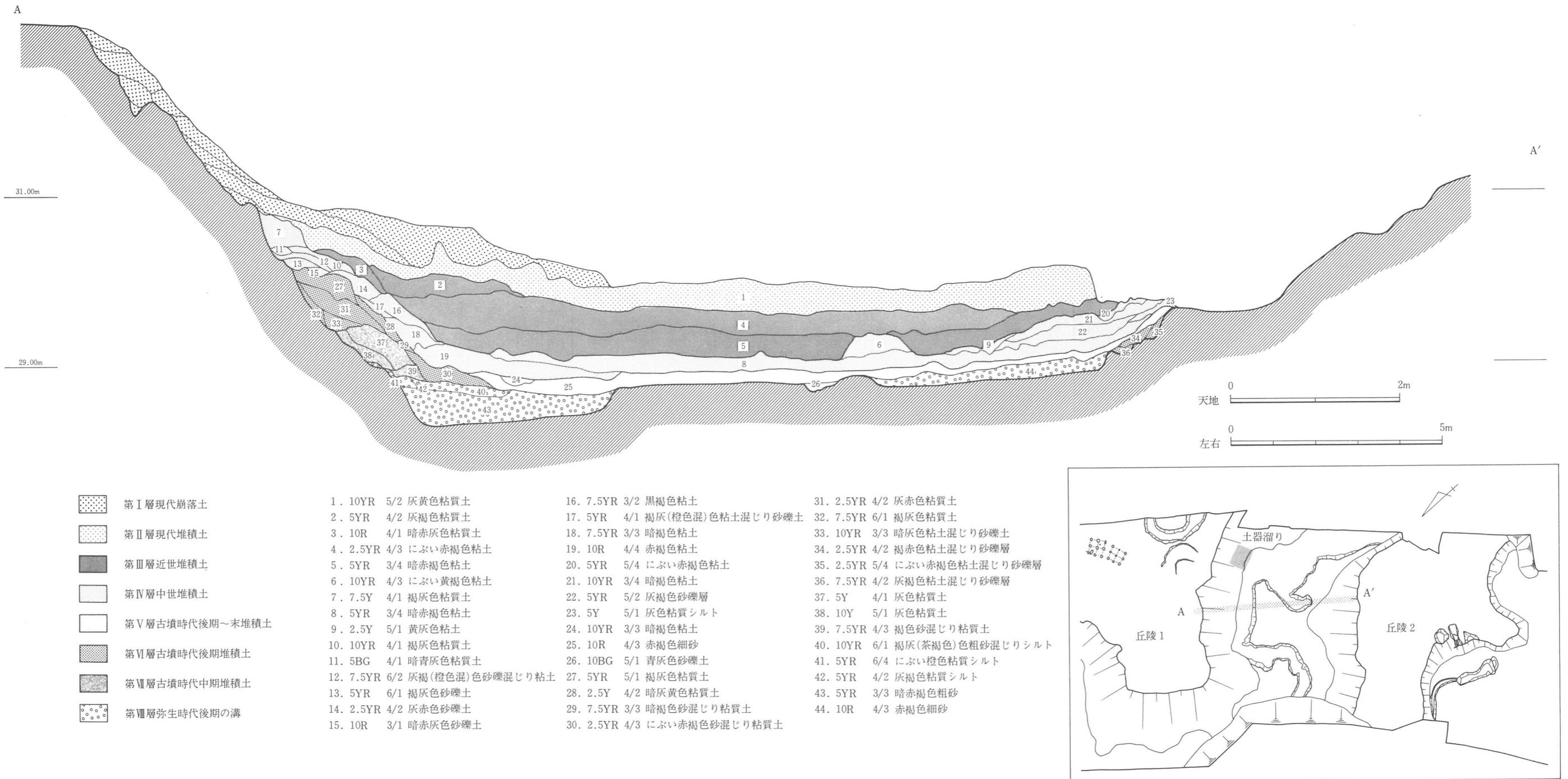
第Ⅰ層は現代の斜面崩落土である。

以上の堆積状況から、谷の変遷が捉えられた。弥生時代には谷底に小規模な自然流路が開開口部に向かって走るが、谷底全体を覆うような堆積層は認められない。谷底全体で堆積が認められるのは第Ⅴ層、古墳時代後期から末葉にかけてである。しかし、この第Ⅴ層も薄い砂層の堆積であり、弥生時代から古墳時代末までは自然の開析谷として機能していたことがうかがえよう。

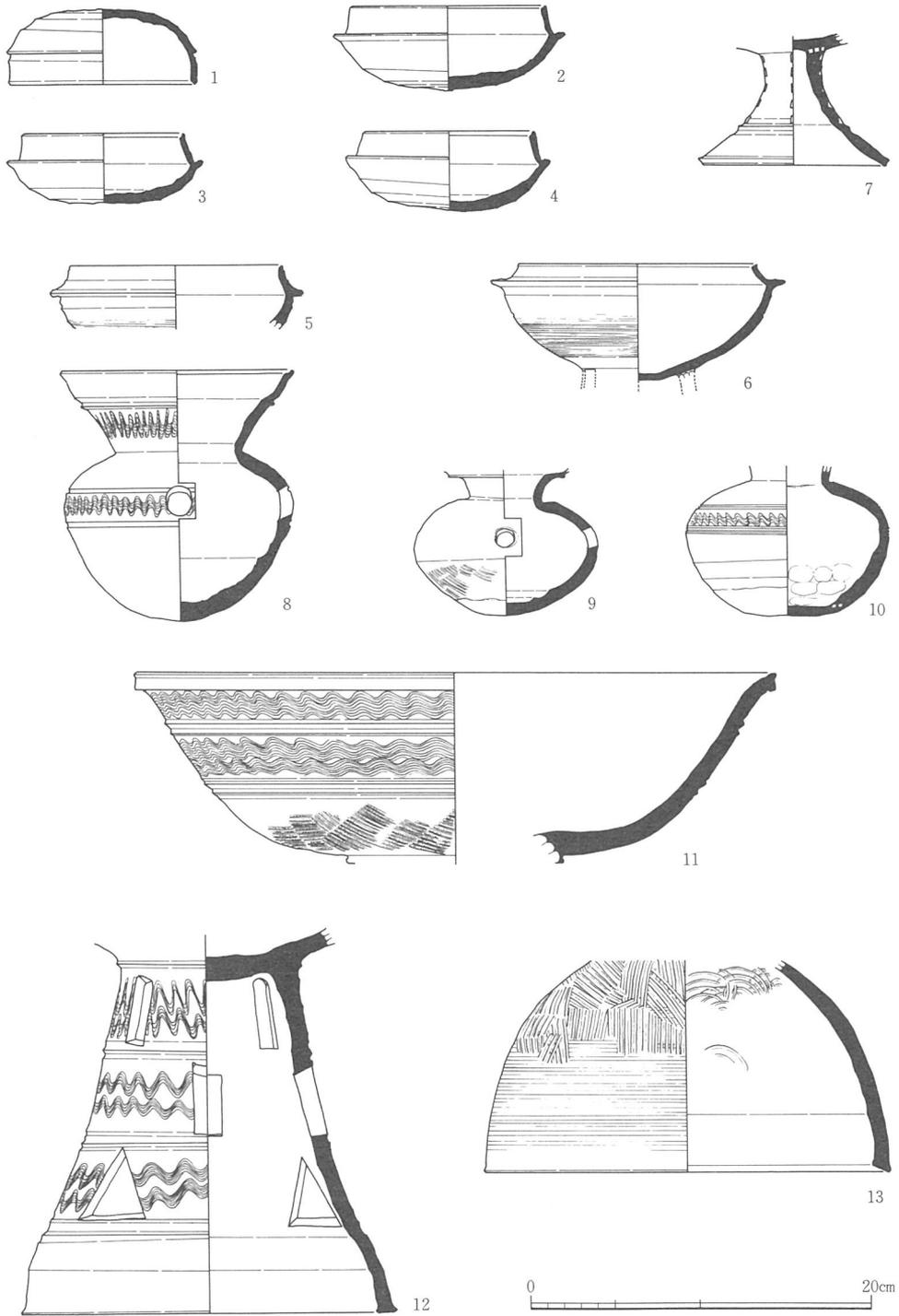
堆積の状況が一変するのは第Ⅳ層、中世以後である。粘質土が厚く堆積し、人為的な整地土も観察され、耕作地としての開発が考えられよう。近世に至っては、その堆積層の状況から長期にわたる滞水状況が観察された。この時点では現在とあまり変わらない状況で溜池化していたのであろう。また、今回の調査区ではこの奈良時代や平安時代の堆積層は確認されず、把握することはできなかったが、丘陵に展開する集落や周辺調査区（393-O L）の状況からは当該時期にも谷部の人為の開発が行われた可能性も考慮されよう。

第2項 出土遺物（第16～20図，図版32・33）

谷の出土遺物は弥生時代から現代に至る各時期のものがある。以下各層の出土遺物の傾

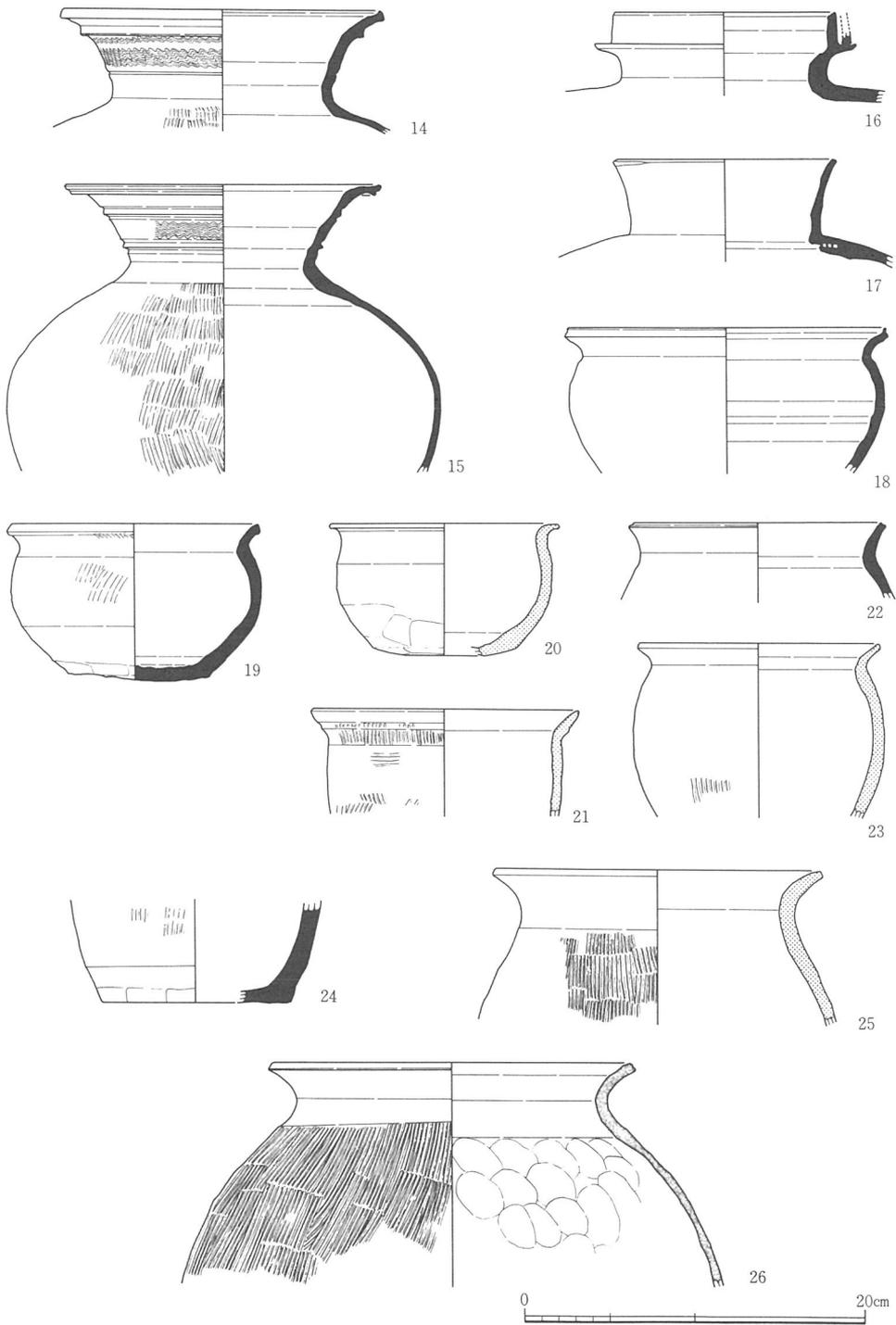


第15図 1-O L土層図



第16図 1-O L 丘陵1側斜面出土遺物 (1) S=1/4

第1節 1-O Lの調査概要



第17図 1-O L 丘陵1側斜面出土遺物(2) S=1/4